

平成26年（西暦2014年）11月

瞑想録（その1）

滝沢 無縛（たきざわ むばく）

本論は私の日々の瞑想の結果をまとめたものです。その瞑想の主題は、東洋思想に基づく「連続体と蓋然論理」です。究極的には科学と対をなすと思っているものですが、科学周辺に位置するものの、科学そのものではありません。学問でもありません、再現性も絶対真も保証しないことを「売り」としているからです。また、瞑想であるという特性上、根拠をこれ以上提示できない言明も含まれています。特に主題以外の部分には、現行の常識では「誤り」とされていることやタブーとされていることも含まれていますが、あくまでも主題を見て下さい。その上で言明を信じるか信じないか、それは読者一人一人に委ねられています。なお、「真理は深いほど簡潔であるべきだ」という立場からは、この論集における何十頁ものだらだら書きは、残念ながら私がまだ真理の核心に到達していないことを、如実に表しています。なお、この論集の基礎となる先立つ瞑想録については、下記のサイトを参照してください。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

1、彼岸に渡る

悟りを開く、彼岸に渡るとは、非連続的な現象であって、個人でやるのは難しく、お釈迦さまや高僧の助けが要ります。それはあたかも、人では飛びこせない深くて広い奈落があって、それを何とか飛び越えるようなものです。

無限に伸びる数直線上を一人で歩いていても、進みはするが永遠に無限遠点には至らない、そのようなものです。その無理を可能にするのが、お釈迦さまや高僧の知恵の力です。啐啄（ソツタク）同時とか言います。

この悟りの過程は例えれば「アキレスと亀の逆理」のようなものです。足の速いアキレスは亀を追いかけていますが、さっき亀が居た所まで辿りつくと、少しだけですが亀は先を行っています。こうしてアキレスは永遠に亀に追いつけません。

この逆理をまともに受けて、永遠に遠いと考えるのは、此岸に居る人。この逆理は次のように考えるのが正しいのです、「アキレスは有限回の尺取りでは亀に追いつけない」。

瞑想録（その1）

尺取りはする度に、それに係る時間は短くなります。かくて無限回の尺取りであっても、有限時間で超えられるわけです。お釈迦さまや高僧はあたかもかように、人を彼岸に渡らせます。「無限回の尺取りの、概念化による有限化」と言っても良いでしょう。

あるいは、彼岸に渡るとは音速を超えるようなものです。音速を超えるときには「マッハの壁」があって、衝撃波により物は破壊されてしまいます。人知では越えられない壁と同じです。マッハの壁を越えるとき、あるいは一般に物の速さが波の速度を越えるとき、何らかの物理量が実から虚に、あるいは虚から実に転化します。この転化が人力では困難なわけです。此岸が実なら彼岸は虚、彼岸が実なら此岸は虚です。

2、ラクダの不思議

オリンピックは東京に決まり、イスタンブールは破れてしまいましたが、これはイスラム圏で有名なお話です。

あるときお父さんが、ラクダを11頭残して亡くなりました。遺書には、「ラクダを長男が $\frac{1}{2}$ 、次男が $\frac{1}{4}$ 、三男が $\frac{1}{6}$ で分けなさい」とありました。兄弟たちは困ってしまいました。11頭を殺さずに、そのような分け方は、およそ思いつきません。

そこに1頭のラクダを連れた老人が通りかかり、そのラクダを兄弟たちに貸してくれました。ラクダが全部で12頭になったので、長男が6頭、二男が3頭、三男が2頭を取りました。結局三兄弟で11頭取ったので、1頭余りました先の老人は貸した一頭を返してもらって立ち去りました。

以上です。老人のおかげで円満な相続が出来ましたが、老人はラクダを損していません。ちょっと不思議でしょう。トリックの種明かしをします。ポイントは、息子3人の取り分を足しても、ちょうど1にならないと言うところです。数学に不思議はありませんが、不思議に見せることは出来ると言うことです。

3、月は2つある

夏が過ぎて秋となり、そろそろお月見の季節ですね。さて先日、私は例のごとく、鶴見の曹洞宗大本山総持寺に参禅に行ってきました。控室で待機していた際に総持寺のプロモビデオを見たのですが、その際総持寺開祖の蜷山禅師が、弟子で二祖の峨山禅師に問答を仕掛けている場面がありました。曰く、「峨山よ、月が2つあるのを知っているか」。

瞑想録（その1）

ビデオには「正解」は出てきませんでした。そこで、素人の見解で恐縮ではあるのですが、私はこの問答の正解を以下のように推量しました。先ず考えられるのは、「1つは本物の月、もう1つは心象としての月」と言う解ですが、これはちょっと平凡すぎます。

そこで思ったのですが、「1つだ」とか「いや2つだ」とか、数に拘っているうちは既に執着になっているということです。愚かしい限りですよ。そもそも仏教では「零＝無限」であって、数なぞは無意味であり、下らない分別の典型なのです。蛭山禪師はその数を用いて、分別や理性の愚かさを教えようとしたのではないのでしょうか。

ちなみにこの時峨山は、「分かりません」と答えたそうです。そしてこの回答は実に正解だったのです。無理な質問には無理な回答が適切だからです。ただ、峨山禪師は「矛盾の効用」を知った上で「分かりません」と答えたのではなく単純に分からなかっただけなので、この時は蛭山禪師に却下されました。

「分かりません」はより適切には、「分かるけど分かりません」と言う答えになるでしょう。この口上は典型的な矛盾であり、従って真の理解があることも示せます。もっともこのようなことを一々口上するのも今一芸が無いので、峨山は、はいていた草鞋を脱いで頭に載せて立ち去るとか、月を目がけて笑い飛ばすと言った態度で示したなら完璧でした。

なお、「禅の公案の解釈は一通りとは限らない」と言うことで、上記私見をお許しください。

4、田舎に帰った知り合い

もう3月も前になるが、私は三浦半島で、地元自治体主催のウォーキング大会に参加した。出発式には市長や地元選出の国会議員まで挨拶に駆けつけるとい、まさに地域を挙げての大会だった。そして下働き、つまり弁当を作って届けたり、道案内をしたり、交通整理をしたり等の雑用は、地元商店街の有志が、駆り出されて手弁当でやっているようだった。

もちろん裏の仕組みは日本流に良くできていて、挨拶した議員たちには「ちょっとやってもらってたんまり上納金を貢ぐ」ことになっており、地元の商店街は見返りに陳情を

瞑想録（その1）

聞いてもらったりしているわけだ。考えようによっては、参加費を払った我々参加者が一番馬鹿だったわけである。

ところで、知り合いで、東大に現役合格してそのまま博士号まで取った知り合いが、「親父の鉄工場の跡を継ぐ」と言って、田舎に帰って行った。彼は博士号取得後、しばらく一流会社で研究職をやっていたのだが、そう言う訳で田舎に帰ると言う。

私は、「会社員なんて所詮は一生使用人に過ぎないのだから」と花向けたが、正直なところ彼のような頭脳明晰で一を聞いて十を知るような人物が、仮に鉄工場の経営は出来たとしても、地元商店会や同業者の集い、あるいは地元住民との共存をうまくこなせているのか心配になる。

地元の付き合いには、冒頭で記したような、手弁当での兵隊の一人と言う「仕事」もあるだろう。ちなみに彼の選挙区の議員は、土建業者の成り上がりだ。その議員の選挙の手伝いもさせられるだろう。彼は「親孝行」との評価は受けたのかもしれないが、それには代えられない屈辱の日を送っているのではないか。もう音信も途絶えたが、人ごとながら心配している。

5、赤い川の昔話

子供のころTVで見た人形劇で、変に記憶に残っているものがあります。

昔ある村に、「川の水が赤くなったら天災が来るので逃げろ」と言う言い伝えがあった。偶然にこの言い伝えを聞き及んだ他の村の盗賊たちが、「これは使えるぞ」とひらめき、川の上流に行って明け方に赤い塗料を川に流した。

真面目で信仰心の篤い村人たちは、川が赤くなっているのを見つけると、「大変だ」とばかりに、全員村から逃げ出してしまった。盗賊たちは「しめしめ」と空っぽの村に入ると、やすやすと略奪を始めた。するとそこに本当の大波が来て、盗賊たちは全員溺れてしまった、と言うストーリーです。

私がまず不思議に思ったのは、盗みと言う人に行為に、罰とは言いながらそうタイミング良く自然現象が起こるのかということでした。それに、仮に天や八百万の神々が盗賊たちを懲らしめようとしても、天災などことさらに起こさなくても、もっと手軽な手段があったことでしょう。

更に言うならば盗賊たち、もちろん悪者ですが、噂を聞き及ばなかったら川に塗料を流して盗みに入ることはなかったでしょう。「赤い川と天災」の噂を盗賊たちが自ら流したと言うならば、これは自業自得ですが、そうではない。盗賊たちにもかわいそう、哀れな面があります。盗賊たちが来なくても、この日がそもそも大波の運命の日であったとしたならば、それでも川は何らか別の理由で赤く染まったのでしょうか。

話を整理してまとめてみましょう。

- ①もし言い伝えが盗賊たちを滅ぼすためにあったとしたら、盗みと大波のタイミングは説明できるが、真面目な村人の存在は不要で、仕掛けが大げさすぎます。
- ②もし言い伝えが盗賊たちに一切無関係だとしたら、たまたま大波の日に村に残った盗賊たちは余りにも不運でした。
- ③そもそもこの言い伝えが無かったら、誰も困らなかったかもしれません。とすると古来の言い伝えは、単に人騒がせなだけだったことになります。

つまりこの言い伝えは、「あればあったで意味が通り、無ければ無いでこれまた矛盾なく意味が通る」と言う種類の言い回しです。

この状況は「本当つきの逆理」に似ています。正直者が「私は正直だ」と言っても何の矛盾ありませんが、嘘つきが「私は正直だ」と言ったとしても、その表明自体は嘘なのですが、嘘つきが嘘をついているので整合しています。結局この表明は、真か偽かの判別がつかない命題、つまり逆理であるわけです。

さて、昔話に戻って、この昔話のモチーフは結局何だったのでしょうか。一般的に東洋文化は欧米文化と異なり、矛盾は議論の終点ではなく、むしろ悟りや文学に至る意義深い突破口です。この観点からこの昔話全体を観じますと、私にはこの昔話のモチーフは、真偽を越えて、「**人の小知恵の、雄大な自然に対するあざとさ**」を表現しているように見えます。ヨガマスターの言葉を借りれば、村人たちは「素朴な心のプーさん」、盗賊たちは「理性でひねた心のラビットのとつつあん」と言うことになります。ちなみに科学者のマインドは後者です。

最後に、以上の物語の全体観に基づいて、「本当つきの逆理」の全体観をしてみましょう。思うに、人を「正直」と「嘘つき」に二分すると言う前提が非現実的なのではないのでしょうか。ひとは大かれ少なかれ、本当も言えば嘘もつきます。「本当つき」「嘘つき」とは、同じ人間の異なる両側面に過ぎません。しばしば言われますが「二分法は愚か者の議論」と言うわけです。

最後に、冒頭の昔話を「赤い川の逆理」と呼びたいと思います。

6、宝くじのゲン担ぎ

先日TVで宝くじについて見た。宝くじをいかに当てるかと言う内容で、実際に何億円も当てた人や、実績のある売り場の売子の子の話、さらには「宝くじ評論家」なるセンセーまで現れて、あたかもお祭りのようであった。私も宝くじは買ったことはあるが、最低の5等がたまに当たるだけで、換金に行くのすら面倒くさかったりする。多くの人が同様なのだろうが、それでも「宝くじ熱」は衰えない。

宝くじなんて科学的には純粋に確率論の世界で、そうでなければそもそも、くじなんかが商売になるわけがない。怖くて胴元なんかやっていられないにもかかわらず宝くじと言う世界はジンクスの山なのである。良く当たる売り場、良く当たる売子、良く当たる番号、当たりそうな運気の流れ、良く当たる普段の心がけ、当たりやすいお日柄、それこそ人知の及ぶ限り無限種類のジンクスが存在している。

そしてこう言うことを知りつくした宝くじ評論家の先生、全国何千とある売り場を全て知り尽くし、それらを過去の実績、売り場の立地、売子の面々、更には風水や最近の世相まで反映して、もっともらしく「今当てるコツ」を滔々と惜しげもなく教授していた。

私が感心したのは、その先生や出てくる客たちが皆生き生きしていたことだ。誰だって金もうけしたいのだから、目が血走ってギンギンになって居るかと思ったら、結構皆さん楽しんでやっている。先生なんかは、知識を披露するあるいは自分の予測が当たるのが楽しくてしょうがないかのようだ。分野がもっと学術的だったら大学教授にもなれたであろうに。

ところがこれらの人々、大学教授や学生よりもはるかに人生を楽しんで居るのだ。「所詮は確率論だ」と切り捨てる大学のセンセーや学生が、生気がなく根暗なのと正反対に、生き生きしているのだ。これはどう言うことだろう。

「ゲン担ぎなど科学的には無意味」、これは正しい。だがゲン担ぎにはゲン担ぎの論理があって、こちらはこちらでいかにももっともらしい論理がある。だから結局ここは、異なる立場に起因した異なる背反的な論理の衝突なのだ。今は初等教育から始まって科学一色の世界だから、多くの人が「科学が正しい」と信じている。うちの嫁様のひいきの美容師だって、くじはやるが「非科学的だ」と知りつつやっているそう。

瞑想録（その1）

だがここでちょっと考えてみよう。科学なら絶対なのか。確率論だって「全ての素確率は平等だ」と言う、科学的には極めて健全であるものの、仮定、前提、推測が入っている。その観点からは科学が絶対真とは言い難い。むしろどちらもどちらであって、どっちの立場・論理を選ぶかは選ぶ人が各自の情理で決めるのだ。

物事のすべてについて、実質無限個の立場があることを想起すれば、すべてに付いて無限個の背反な論理があることになり、つまり論理などどうにでも作れるのであって、人々の日々の決断は情理によって行っている。情理の方が論理より上位にあって、論理学などクソと言うのが世の中の実相なのだ。「科学対非科学」の対立は「基督教対回教」と言った神学論争よりも高位でもなければ明らかでもないのだ。そして現役時代のほとんどを科学技術で食ってきた私だが、陰気臭く面白くも何ともない科学的立場よりも、迷いなくはるかに豊かで創造的な非科学的立場を選択する。

「進化論」と「創造論」の対立がある。前者は科学的思弁に立脚し、後者は聖書信仰と言う立場に立脚している。それぞれの立場に立脚すれば、その上に構築された論理が真である。即ちキリスト教徒にとっては創造論が真なのだ。そして科学論者に対して言いたいのだが、進化論にも彼らにとっては健全ではあるものの推測や内挿が入っている。

ではなぜ現代において、科学的立場のみが称賛され、教育においても科学的思考の実が教育されるのか。それは一重に科学的思考が稼げるからだ。科学的思考は新技術の開発から民主主義や個人の尊厳にまで至るが、いずれも付加価値が高く、かつ人権の最低限を保証し、経済国力主義の現代社会においてはデフォルトに特権的地位を獲得している。端的に言えば、特アのプロパガンダに屈しないためには科学的教育がずば抜けて功利的であり、国の存続にかかわるのだ。科学的立場にこの現世利益を越えた何の絶対的優位性もない。単に国策である。

ではなぜ科学主義がこうも国力や経済力に結び付けたのか。それは一言で言えば科学がバカチョンだからである。科学者と言うとあたかも頭が切れるとのイメージがありがちだが、実際は世の中で一番単純な手続きに過ぎない。単純だからこそ弁論主義や根拠主義と言ったやはり単純なものと結びついて、実験しやすく再現しやすく、かつ新物質、新商品と言った当たり前の物、当たり前だから当然に実現できた便利な新商品を供給できるのだ。科学的とは物質に目をくらまされているが、当たり前しかない、遊びや余裕のない、極めて退屈で憂鬱なユートピアなのだ。

瞑想録（その1）

ただ、人はよっぽどの金持ちの息子でない限り、否応なく日々の糧を稼がなければならない。そして稼ぐためには何らかの科学技術の専門家にならなければならない。そして学校はその手に職を付けるところだ。面白くないのも当然と言えよう。会社は非人間的であり、給料は我慢代だ。そのいびつな社会への憂さ晴らしは、残りの時間で自分の金でやってくださいと言う訳だ。

この人工的世界は主として欧米キリスト教の、「人は神の奴隷である」と言う人工的な教理で形成された人工的な世界構造であるから、辞めようと思えば辞められる。世界同時で抜け駆けなしで、用意ドンで世界中の労働時間を半減させれば良いのだ。もちろん「進歩」は遅くなるが、進歩のために人が苦役を強いられているとは、本末転倒ではないか。人は古墳時代や狩猟時代には1日3時間ほどしか働かなかったと言う。それで良いではないか。

話を冒頭の宝くじに戻そう。私は依然として宝くじをやる気はないが、それは科学的信念を貫くためでなく、宝くじよりもっと自分に合ったもので、効率と成果しか頭になくて遊びのない科学主義の汚染から決別したいと思っているからだ。私の場合具体的には「わび・さび・遊び・余裕・ひらめき・勘・未来予測」と言ったものだ。私は自分を気付きや洞察、つまり人の気付けないところに気づくことが出来る人間と自覚している。その「能力」を科学と言う泥臭くて王道のないものでなく、一足飛びに飛べる所に使いたいのだ。楽しみである。

なお、以上の主張はあくまでも私個人のものであって、他人が私と違う信念を持とうが、私の見解に賛同しなかろうが、何ら関係ないし反論もしない。自己満足で十分だ。だから以上の持論についてこれ以上理屈をこねるつもりはない。

7、諸行無常の本質

仏教の本質は諸行無常である。つまり「常なる物、恒久的な物はない」と言う悟りである。釈迦は、バラモン・ヨガの教えに基づきながらも、特に「執着」なるキーワードに注目し、これがすべての不幸の源であり、五感の働きはすべて空（気のせい）であると看破した。釈迦の「執着」はイエスの「罪」と並ぶ、極めて人類普遍の、極めて本質的なキーワードである。

ところでヨガの教えとは、自らを神と一体化させることにより天上の随喜と至福に至ることを最高の境地としたこれまた極めて普遍的な教えである。そしてヨガの教えから見れば釈迦の悟りは、「苦しみ」に特に特化した教えであると言える。つまりヨガと言う

瞑想録（その1）

高度に対称性の高い教えに対し、釈迦の悟りはあえて苦しみへと、言わば対称性を破った形となっている。これは先年南部陽一郎先生のノーベル物理学賞の授賞対象となった業績である「対称性の自発的破れ」理論と、なにやら並行して見える。

さて、かつて鴨長明は、鴨は加茂川に通じて神官の系譜であるが、仏教にも造詣が深く、その意味で日本固有の「最終宗教」である神仏習合になっていると言えるのだが、その著書「方丈記」の冒頭で、「ゆく川の流は絶えずしてしかも元の水にあらず。流れに浮かぶ泡沫（うたかた）もかつ消えかつ結び、久しく留まりたるためしなし。」と高らかに宣言した。まさに仏教の本質の諸行無常が、この一言で完全にかつ分かりやすく表現されている。

前置きが長くなったが、話の本題はここからである。うたかた（泡沫）が流れとともに変形し、離散集合と生成消滅を繰り返す。しかも同じ形の離散集合や生成消滅は2度とない。当たり前ではあるが、人はなぜ、泡沫が離散消滅を非定常的に繰り返すと認識できるのだろうか。認識できるためには今日の前にある泡沫がさっきどこにあってどんな形をしていたか、その変遷と言うか連関を認識できていなければならない。さもないければ目の前の川は全くの混沌で、離散集合と言う因果関係すら理解できないであろう。

実はここに、諸行無常の本質がある。諸行無常とは確定的な法則ではないが、しかし決して混沌ではなく、むしろ一定の蓋然的な秩序の表現であると言える。一言で言うと、「諸行無常」という社会秩序なのである。これは「世は常なり」とする秩序に比べればその内部整合性は低いかもしれないが、しかし依然として秩序なのである。そしてこの蓋然秩序の根源は、同じ泡沫を「同じである」と認識できる能力、あるいは「同一性の認識」、つまりある種の恒常不変性の認識なのである。

要するに「世は常ならず」の根本は、反語的ではあるが「世は常なり」と言う、「同一性原理」とでも呼ぶものに立脚していると言える。だからこそ諸行無常は無秩序でなく秩序なのだ。そして私は寡聞にして、この「同一性原理」と言う不変量にまで遡った諸行無常の解釈を聞いたことがない。不変量は現代物理学の肝である。

最後につけたしになるが、泡沫を運ぶ流れについて、流れはナビエ・ストークス方程式に支配されるが、この式はその移流項（非線形項）の存在により、定常解が無いことが知られている。つまり流れは常に変動しているわけで、まさに諸行無常である。そうなのだが、と言って川の流れの大筋の、言わば骨太の部分はほぼ一定の流れ方をしている。これは流れと言うものが、まだ応用数理としては定式化されてはいないもの

の、「蓋然定常」とでも言うべき定常的な性質を持つとすることを示してはいないだろうか。

8、放課後の茶飯事

健二：先生、春樹君にいじめられました。

井原先生：おやおや、それは困ったね。で、けがはないかい？

健二：春樹君が僕に虫を食べさせようとしてしました。

井原先生：ほう、春樹君がね。君とは家が隣だったっけ？

健二：いえ、それは明人君です。春樹君は目が大きくて…。

井原先生：ああ、信二君ね、目が大きいね。

健二：それは隣のクラスの子で、僕をいじめたのは春樹君です。

井原先生：ああ春樹君、そう言う生徒も居たかな。で、お母さんはなんと言っている？

健二：お母さんですか、まだ言っていないのですけど。

井原先生：ああ、そうだね、そんなことをされたら大ごとになっちゃうね。

健二：お母さんに言ってはいけないのですか？

井原先生：ああ、良いけど、でも、言わなくて良いよ。

健二：で、ぼく、これからどうしたら良いのですか？

井原先生：「ぼくがこれから…」、これからねえ、元気でやろうか。

健二：でも、春樹君がまたいじめてきます。

井原先生：定雄君に、「もう止めて」と言えばどうだろう。

健二：あのう、春樹くんなのですけど。先生から注意してもらえませんか。

井原先生：ああ、その春樹くんね、今度会ったら言っとくよ。

健二：先生はいつかの日もそう言いましたが、春樹君に伝わっていません。

井原先生：そうだったかな。まあ、人生いろいろあるしな。今何時だろう。

健二：先生は時計ばかり見えていますけど、話を聞いているのですか？

井原先生：もちろんもちろん。さあそろそろ行かないと。

健二：僕はこのままでどうなっちゃうのでしょうか？

井原先生：話して気が済んだよね。じゃあまた、この辺で。

（井原先生はそそくさと学校を去っていく）

井原先生は趣味で町のオーケストラの指揮者をしていて、頭がそっちで一杯だったのだ。それ以外の学校の仕事は全部上の空。公務員だからね。

瞑想録（その1）

ちなみに井原先生はその後頑張りが認められて、県の交響楽団の指揮者になった。他方の健二君は不登校になり、結局家出してその後ホームレスになり、凍死体で発見されたと言う・・・。

（解説）この話には、井原先生と健二君と言う2つの立場があると思う。井原先生からすれば、教師などと言う決まり切った仕事などやりたくないし、自分もそこまで無能だとは思っていないが、家族を食わせないといけないから嫌々やっている。世の中の仕事の大半が下らないと言う社会問題こそ真剣に改善されるべきで、自分はむしろ無策の犠牲者だと言う立場だ。芸術系にこう言う「埋もれ人」は多いだろう。暴論は承知の上だが。

他方健二君の立場に立てば、先生以外に相談できる人は身近にいない。でもうすうす、井原先生は上の空だと知っている。では別の先生や大人に相談すべきと言うことにもなろうが、小学生も高学年になると大人のずるさ、大人は事なかれ主義で、面倒から逃げるかあるいは教訓的な話でお茶を濁してお終いだと気付いている。あるいは大人と言ってもみなその程度の気付きの、頭の悪い雁首だと知っている。

結局ここは健二君が他人に頼らずに何とか知恵と技を使って、いじめっ子に土下座しようが嘘をつこうがこけ脅そうが、卒業まで時を稼いで逃げ切るしかないのだ。世の中養老陰に行ったって、それこそ死ぬまで、いじめなんか必ずあるのだから。

9、ひらめきの構造

物の考え方には還元論と全体論がある。還元論は「部分の理解があればその単純和で全体が理解できる」との立場で、科学主義がその典型だ。だから科学は専門の細分化にひたすら走る。他方全体論は、「全体は部分の単純和を越えている」との立場で、従って部分を全部理解しても、全体理解にはさらなるひらめきと言うか気付きが必要になる。

もちろん科学の最先端でも、真理に行き当たるのにひらめきが必要な場合もあるが、それは、探索する前から真理のありかは決まっているものの、それがどこにあるのかやってみないと分からないための試行錯誤であって、科学者の時間と手間の大半は、その気付きが正しいことの証明と言う気が遠くなるような単純作業に費やされなければならない。

瞑想録（その1）

だから私は、「自分を本当に地アタマが良いと思う人は全体論をやりなさい」と勧めている。全体論の気付きが還元論の「気付き」と異なる点は、納得できさえすれば何でもありだということだ。絶対的な正解はない。あるいは幸いにして主観が入る余地がある。ひらめきや気付きとは、即ち主観であるからだ。当たり前しか許されない還元論よりも、面白ければ何でもありの全体観の方が、ずっとやりがいがあるし、霊長類の長である人類にふさわしい。

気付きには正誤はないが優劣があり、多くの人々が感心する気付きほど高い。気付きの身近な例は冗談やお笑いで、舜発的な切り返しが軽妙なほど、人々が感心する。ここで気づいてほしいのは、IQの高い高学歴な人ほど切り返しがうまい訳ではないということだ。つまり、数学や物理は、「頭脳を鍛える価値がある」と称しているが、実際は教師くらいしか職がない彼らが食っていけるための、壮大な虚構にすぎないということだ。

さて、従来全体論は科学の範疇内で、主として人文科学やシステム論で取り扱われてきたが、それゆえに散発的な成果しか得られておらず、還元論に比べて認知度も薄く、教育の現場にも反映されていない。その結果現行の教育は知育偏重で全人教育になっていない。不幸だ。だがその対処法は簡単である。科学であることを辞めれば良いだけだ。現に主観が入る、むしろ主観を積極的に取り扱い、かつ再現性を前提としないのだから、当然に科学ではない。科学でないから意外性がある。

全体論の最も高度なものは、悟りであろう。悟りとは理性と言う論理を捨て去った時に生まれる、イデオロギーと言う鎖のない真の気付きである。科学は客観性を標榜するが、その対極にある悟りこそ最も客観的で明鏡止水である。あるいは神道で四季自然に感謝する心、神社で柏手を打って体が引き締まるあの気持ちも、最も高い全体論的気付きである。

この全体論的訓練は、何の役に立つのだろうか。役に立つという問いが既に狭い功利主義を前提としていて愚かなのであるが、もちろん全体論を追求した結果心臓バイパス手術が可能になったというようなことはないが、人生の大きな決断、身近なところでは政治判断や経営判断の善し悪しは、全体論的気付きが大きく作用している。優れた経営者は、各部門の報告を受けた上で、単にそれらの平均や総合でなく、ずっと先んじた方針を打ち出すことが期待される。これが出来ないと会社は傾く。あるいは政治家は、そもそもばらばらの関係諸分野の希望を聞きつつも、時にそれらと全く矛盾した新方針を出す。矛盾は論理学では破滅の象徴だが、全体論ではむしろ、悟りや気付きに至る近道である。

ところでこの全体論的気付き、あたかも地アタマの良い人にしかできないように見えるが、実際は誰もが日常やっていることなのだ。例えば盆に盛られた豆の山からどの豆を取るか、これだって全体論的気付きだ。あるいは観葉植物の手入れ、しばしばいわゆる知的障害者にやらせる仕事ではあるが、これだって全体観が無いと出来ない仕事である。つまり、全体観や気付きの方が、おそらく個の防衛本能の直接の発露であって、人に自然なのだ。微分積分が特定の人しかできないのは、むしろこれらの科学的操作の方が、人に人工的なせいなのである。

以上見てきて気付いたと思うが、全体論はことさらに言わなくても、東洋では昔からあった、多神教的アニミズム的な発想であり文化なのだ。たまたま現代のグローバルスタンダードが欧米式キリスト教的論理主義であるために、かえって特殊に見えるものの、論理主義の方が薄っぺらであって、人類はもうそろそろ、より高い東洋的全体論的悟りの世界に回帰しなければならない。脳科学が仮に進んだとしても、ひらめきの構造は論理的には理解されずに、むしろ情理として理解されるであろう。そして、成果よりも地アタマで人の程度が評価されるようになるだろう。その時、地アタマの評価は、IQのように数字であらわされるものではなく、むしろ未発見の密教的な多面的尺度で語られるようになるだろう。

ひらめきはまさにひらめきであって、その構造は例えば数式で示されるようなものではない。もしそうならそれはもはやひらめきでなく学習だ。人は学ぶのではなく、コツと勘の養成が最大徳目とされる。未決定、より正確には蓋然確定でしかない将来についてどれだけ先を見通せるか、それはあたかも卑弥呼が有していたような予知能力である。脳科学的に言えば、シナプスの例外的かつダイナミックな結合度が高い人ほど、よりすぐれたひらめきがあるのだ。だから一息ついたときなどに良く、優れたひらめきが訪れる。それ以上は生まれつきの地アタマの問題だ。

10、なぜ働くのか

我々は暗黒惑星の住人ではない。ことさらにお願いしなくても、お天道様の恵みは降り注ぎ、更に土と水は我々に衣食住をもたらしてくれる。これらの恵みに感謝しさえすれば、何故それ以上の付加価値を求める余り、嫌々仕事をするという、結局は自分に向ってこぶしを振り上げる、自らの首を絞めるようなことをしているのか。ひたすら太陽に生かされて、寿命が来たら土に帰ればそれで良いではないか。

瞑想録（その1）

例えばニューギニアの奥地では、携帯電話こそないが、原住民たちは現に働かずに暮らしている。日本だって四季折々の自然が我々に豊かな心、大和魂とか武士道とかわびさびを感得させてくれる。素晴らしいことだ。人はそもそもこう言った恵みの内の自分の身丈に合った分を、感謝して消費して土に帰るのだ。それ以上何を望むだろう。

知り合いで絵が趣味の人が居る。普通に定年まで働いて、あとは年金で暮らしつつ、身の回りの豊かな自然等を描き続けてきた。その才能たるやほとんど玄人はだし、個展を開けるほどだった。そしてその人がもう高齢になり、終活と称して最近始めたことが、なんと自分が今までに描いてきた多くの絵を破り捨てることだった。世の中上には上が居て、彼の絵などおよそ売れない。残しておいても子孫が始末に困るだけだ。なら一層のこと、「発つ取り跡を濁さず」とばかりに、自分の生に自ら潔く、区切りをつけようと言う訳だ。

効率論者に言わせれば、彼の人生はひたすらエネルギーの無駄遣いと言うことになる。「捨てるような絵を描くくらいなら、ガードマンで良いから人の役に立つ仕事をしろよ」と言う訳だ。「描いて捨てる」、典型的な自慰行為である。だがそうであろうか。人は神の奴隷をするために生まれてきた訳ではない。絵を描いている間、彼は幸せだった。彼の身丈に応じた範囲で彼が生を楽しんだとして、彼に何の非難があり得るだろう。人生の本質とは何か、この哲学的と問いにトインビーは「文明を残すこと」と答えた。とすると残らなかった文明、例えばミケーネ文明の人は全員無駄死にであったと言うことになる。

世の中に安っぽい成果主義がはびこり過ぎている。全員同時にセーノで仕事を辞めれば、それはそれでお天道様等の恵みで生きていけるのではないか。それがそう言う訳にもいなくなってきた。科学技術のおかげである。科学技術の恩恵で人々の生活レベルは向上したが、この恩恵はそれ以上に、辺境の拡大と人口増を来たらしめた。そしてその人口増と辺境改善のために、さらなる科学技術が要請される、これはもう悪循環だ。国連は飢える人に食料を配布する前に、人口抑制について真剣に提案すべきだ。人口が十分に減れば、本気で恵みだけで生きていけ、かつ環境問題も解決する。

科学技術の発達で、物質生産はほとんど自動化された。稲の飼育も、魚の漁獲も、近いうちにほとんど無人化されるだろう。そうすれば本当に、人は働かずにお天道様の恵みだけで生きていけるようになる。待てよ、この議論は上の節の議論に矛盾していないだろうか。矛盾していない。私は「科学技術のおかげで人々は労働から解放さ

れる」と主張しているのではない。逆に、「科学技術は人を労働から解放するところまでやって、始めて存在意義があったと言えるのだ」と主張しているのだ。科学技術も初期の、変人の興味の対象であったうちは良いが、経済的付加価値の追及のために組織的になされるようになった今、単に付加価値を生み出しましたでは許されないということだ。ロボットの研究をするなら、介護ロボットを完成して老老介護を終わらせるところまでやらないと、何もやっていないのと同じ位ダメだよと主張しているのだ。

私は居酒屋が好きである。ささやかな夜のひと時を一杯の酒と山海珍味で過ごすのは至上の贅沢だ。しかも居酒屋は、客はもちろん女将たち経営者も、嫌々あるいは金だけのためにやっているのを見たことがない。このような業界は他におよそないであろう。居酒屋は聖地であり、そこで繰り広げられる毎日は祭りであり、居酒屋の梯子は聖地巡礼なのだ。するとこう言う人が居る、「その山海珍味だって、捕獲、輸送、保存その他科学技術の進歩のおかげでしょう」と。違う、逆だ。科学技術は居酒屋を便利にする時点に至って、始めて「価値がありました」と言えるのだ。

私は残念ながら絵や芸術の才能がない。だから日々の楽しみは瞑想することだ。その瞑想の結果はツイッターに書きとめた後、ある程度まとめてこうしてブログにし、やがては電子小冊子にまとめて自由配布している。こんな書き物はおよそ売れるわけがない自己満足だと知っているし、電子小冊子だっていつかIT技術の革新によって、現行の形式はフロッピーディスク上の情報のように忘れ去られる。でもかまわないと思っている。なぜなら私は出世欲もなければ効率主義者でもなく、今の私が幸せならば明日に忘れられようともこの上なく、冒頭の絵を描く老人のように幸せだからだ。そして幸せのコツはただ一つ、頑張らないことだ。私が尊敬するのは、小原庄助さんである。

11、矛盾の本質

今日本で、TPP加盟への準備が着々と進んでいる。TPPとは、米国がもはや超大国ではなくなって、自国のみで世界の警察官ができなくなった、その一部の肩代わりをアジア太平洋諸国に担ってもらおうと言うのが本音である。もともと米国も、自国の威信にかかわるような本音をうっかり漏らしたりはしないが。日本にしてみればTPPは究極に、人口減少に伴う中流国日本が、米国の笠の下に入るか中国の笠の下に入るかの二者択一だから、答えは有無を言わず明白だ。そしてTPPが発効すると、加盟国はいずれも裸になって、他の加盟国の経済のみならず、文化や民族性等、あらゆるものが土足で入ってくるようになるから、これはもう「第2の開国」である。「第1の開国」とはもちろん明治維新だ。

瞑想録（その1）

さて、その第1の開国が成功した理由は多々あろうが、良く見落とされるのが、「全国民の武士化」である。それまで1割弱の所有物に過ぎなかった武士道が、四民平等によって全国民の共有物になったのである。武士道とは、「死中に活を見出す」と言う、生きることしか前提にしていない欧米哲学にははるかに及ばない、深くて広い境地であり、これを全国民が所有したことは、その後の日本発展の大きな原動力になった。

明治維新の成功においても一つ見逃せない要因に「和魂洋才」がある。心は大和魂のままで技術は欧米から吸収しようと言う心構えで、言いだしたのは佐久間象山であるが、これも日本古来の日本固有の民族性に根付いている。そしてその本質は「矛盾の能動的肯定」である。融通無碍（ゆうずうむげ）なのだ。その心構えで日本は、開国からわずか27年で中国に、37年で超大国ロシアに勝利した。奇跡と言って良い。

日本はその地勢上、四季の移ろいの美しい国である。この四季の美しさが日本人に、自然を愛するアニミズムの心を生みそれは神道に結実した。この四季の移ろいは別の面で見れば、変化への対応力であり、矛盾の肯定的受け入れであった。四季の違いは一方では矛盾であって、この普遍に存在する矛盾が、日本人を薄っぺらな論理に騙されないたくましい精神、論理でなく情理を重んじる精神を醸成したと言える。この矛盾の能動的受け入れは、聖徳太子による仏教の受容、更には平安期より始まる神仏習合の豊かな文化を形成した。

神仏習合は論理的には矛盾である。仏教では現在では前世の因縁であり、神道では先祖の報いなのだが、この2つの理屈をどうかみ合わせると言うのか。日本人は大胆にも、この矛盾をあえて問うことなく、まとめて併せ飲んだ。つまり、美の前には理などどうでも良いと言う、正しい多面的な世界観を確立したのである。この自由度は何にも勝る。そして維新では、この神仏習合を土台に、言わば「神キ(基督教)融合」とも言うべき、和魂洋才を成し遂げたのだ。こうして日本人は現代でも、神社で柏手を打ちつつ遺伝子解析を開発している。大東亜戦争も、物理的にはともかく、精神的には勝っている。

私は長い間フェスタ巡りが趣味だった。ウォーキング・街歩きが趣味だったこともある。B級グルメやユルキャラは今でも好きだ。これらの趣味を振り返ってみると、私は、そして多くの日本人は、これらの多種多様な行為を通して、それぞれを統べる、言わば「土地の神」に会っていたように思う。ウォーキングが楽しかったのは何よりも、そのそれぞれの土地の産土神（うぶすながみ）にまみえる楽しさではなかっただろうか。行った場所のどこもすべてが、何やら神々しいのだ。そしてTPPになって世界標準が入っ

て来ようとも、日本人はこの、神道と神仏習合に代表される自然を敬う、すべてに感謝する、高い気持ちを忘れてはならないし、忘れなければ「肉を切らして骨を切る」如く、再度克服することが出来るだろう。

先日TVを見たところ、祖先の炭焼きを継承している女性が出た。また別の日には廃れた祭りを復活しようと頑張る人が出た。こう言う名もなき人々が、誰にほめられるわけでもないのに頑張る、これが日本の活力である。アゼルバイジャンは親日国であるが、その大元は、かつて抑留された日本人が、ロシア兵の監視が無くても自主的に、とても優れた仕事を残したせいだと言う。その謙虚さの大元は、日本人の和魂洋才、どんな時代にあっても大和魂を忘れない心だ。経済至上主義のゆえに、日本人が安直な浮利を追うことのないことを、心から望むものである。

最後に本題の矛盾に戻ろう。矛盾とは一般に「彼は生きているけど死んでいる」と言うような、理解不能な表明を指すが、矛盾が無いとはどのようなことか。「彼は男だから人間である」、これは矛盾がない。「今は4時だから3時過ぎだ」これも矛盾がない。つまり矛盾が無いとは当たり前であって、面白くもなんともない。精神的深みとは縁遠い、浅薄な世界である。だから逆に、人や国民に精神的鍛錬や心のひだに触れる嬉しさをもたらすのは、まさに矛盾や不条理なのである。そして精神的鍛錬を受けた者は真に強靱で、深く広い。ものの哀れであり究極の美である。

人は美のために、美を求めて生きているのだ。間違っても理屈を求めているのではない。君子は豹変する。豹変とは非連続勝つ非論理な変化であるが、非論理ゆえに賢者は豹変を絶賛するのである。もちろん矛盾のすべてに意味があるとは言わないが、意味ある矛盾を見分ける知恵を持とう。あなたが心から日本人なら、それが出来る。

12、科学の功利主義

科学と言うと多くの方は、限りなく中立で真実で、神聖にして侵すべからずと言ったイメージを持っていることと思う。しかもこの傾向は、科学技術者よりもむしろ、食堂のおばちゃんとかヘアスタイリストのお兄ちゃんのような科学に直接携わっていない人たちに強い。まさに教育の刷り込みの成果である。今日はこれが本当か否かを、主として科学の基礎である数学と論理学に注目して、検討してみたい。

まず科学の大元の数字、1, 2, 3, …について、「象でも蟻でも1匹は1匹」が数字の特徴だが、これは対象物の質の側面をすべて捨て去って、数や量の面にのみ注目した、恐ろしく単純化して情報量を限りなく削ぎ落した「概念」である。そしてこの簡略化

により、言わばその空隙を縫って、加減乗除と言う演算を入れることが出来た。一種の多芸化であり、演算のお陰で数字の世界は、理論的には途方もなく豊かになった。この単純化＋構造化は、実社会における土地の面積の計測やお金の計算に実際に役立っていることにより疑いなく支持されているが、科学者にとっては実社会の支持などどうでも良くて、単に論文が沢山書ければ良いのだ。

その証拠にこの四則演算を逆用して、科学者たちは数字を、負数、小数、分数、無理数、虚数、複素数と広げて行き、演算としては飛躍的に広がった。この内実社会で役立つのは少数と分数くらいで、後はせいぜい物理学と一部の工学でちょっと使う程度だが、そんな「実用性」など、科学者にとってはどうでも良いことだ。

演算にとってのさらなる革命は、変数の導入であった。これにより方程式や関数が発明されて、科学の世界は格段に進歩した。科学者たちはこれらを「論理思考の鍛錬に役立つ」と称しており、そう言う側面がない訳ではないが、戦略的思考の涵養ならばむしろ碁や将棋の方がはるかに優れているのではないか。

演算の拡張主義はここにまで至ってもまだ足りるところを知らない。次の極めつけは微分積分の導入である。これらの導入には「無限小」あるいは「極限」と言う怪しい哲学が必要になる。そしてこの哲学は、それ以前の数値体系や演算と無関係であって、相関もなければ矛盾も無いので、これを導入しようがしなかりが自由勝手なのであるが、科学者は導入する道を選んだ。理由は単純で、その方が多産であり、しかも非自明と言う「面白さ」があるからだ。こうして科学は、タコが自分の足を食って生き延びるがごとく、功利的な自己増殖の道を突き進んだ。

ここで数体系の更に基礎となる集合論について見てみよう。現代集合論は実体がないことを特徴とする「点」を元とし、元の集まりを階層が1段階高い「集合」とであると言う「2階構造」を取っている。言い換えればどんな集合も最終的にはもう不可分の「点」に還元できると決め付けたわけで、これは現実社会の、数字よりもさらに現実離れした単純化なのであるが、数字の時と同じく、この単純化の空隙のおかげで「元と集合」と言う階層構造を導入でき、この構造が山ほどの論文の製造を再び可能にした。しかも「最後は元に行きつく」「すべては元の単純和だ」と言う、西欧流の恐ろしく単細胞な発想は、「部分さえ理解できれば全体はその単純和に過ぎない」と、科学主義、専門細分主義に無条件のご朱印状を与え、これが現代の科学技術業界の繁栄の基礎を形成している。

その一方で科学は、「臭い物には蓋をしろ」もやっている。第1に連続体と言う質的な実体を、「無限個の点の集まり」であるとして、面倒な連続体を考えなくても良いことにした。無限大は無限小の反対概念なので、極限を取り入れるなら無限大も正面から取り組むべきなのだが、それはしない。その理由は単に、美味しい結果が出て来なくて功利主義に反するからだ。また集合論においても、「自分を含む集合」と言うものが、どうやっても始末できない矛盾を抱えることに気付き、本当は拡張主義の観点からはこれを何とか取り入れたかったのだが、科学の金科玉条である「論理的無矛盾」をどうしても達成できなかったので、「こう言う無限に近い物は科学ではない」と、追放して見ないことにして片付けている。

ここまで見てくると、科学は真実のためにあるのではなく、自己増殖のためにある極めて功利主義のご都合主義的な実体であることが見えてきたと思うが、これまでの例は主として数学に偏っていたので、科学全体に直接関係する都合主義の例を挙げる。それは帰納法と言う推論方式である。帰納法は例えば、「私の周りの子供はみんな1人で生まれてきた、だから人の子供は動物と違って常に1人で生まれてくる」と言った形の推論形式である。

科学のように再現性と無矛盾性を金科玉条とする手続きが、なぜ反例が1つでも見つければすべてが水泡に帰すような脆弱な推論形式を科学待遇に認定したのであろうか。それは、仮に帰納法を、無限と同じく科学でないと除外してしまうと、残る推論形式は演繹法のみになり、演繹法とは例えば「黒い馬は馬である」と言うような、推論過程で何ら新情報の追加のない物、つまり当たり前しかなくなってしまって、恐ろしく不毛になるからである。そしてこれまでの科学の成果のほとんど大部分は帰納法に依っている。科学とは、一般の付託に反して、実は恐ろしく不安定である。

以上見て来たように、科学とは一神教の神のように絶対孤高で全知・全能・遍在なものではなく、むしろあまたある諸手続きの1つに過ぎないこと、しかも論旨一貫としていように見せて入るが実際は増改築を繰り返した家屋のようにかなりゆがんだ形をしていることが見て取れたと思う。諸手続きの一つに過ぎないならば、別の手続きだって同等に存在しうることになる。

私はそんな別の手続きとして、点ではなく連続体に基礎をおく全体論的集合論を検討している。こちらの手続きはご都合主義をあえて廃しているの、今のところ「目覚ましい」定理は見えていないが、東洋哲学、特に禅や悟りと関係が深く、かつ情理と言う形で主観を能動的に取り入れる手続きである。なお、「科学である」と言う不当な縛りから自由、「サイエンスフリー」な手続きである。矛盾、無限、ひらめき等に正面から向

きあい、「すべては蓋然である」が合言葉である。詳細については、私が今までに公にした小冊子群を見て欲しい。

13、ある若者の最後屁

幾年か前に会社での出来事です。ある派遣社員が、年季が来て雇止めになったのでお別れ会をしようと言う事になりました。正社員ならともかく派遣社員のお別れ会とはご丁寧な事だと思いましたが、いつもそうですし、こう言うところで逆らって目立つのも愚かなので、出席しました。とある昼食時、課の社員と派遣社員全員が集まってささやかな昼食会と言う訳です。

会の後半になって、課長の贈る言葉の後に本人から最後のあいさつがありました。「親とけんかして金に困り、仕方なく派遣になった」そうです。そして、これが最後だから何を言っても怖くない「最後屁」と言う訳でしょう、色々ぶちまけてくれました。「だいたい微分方程式を解ける人が一人も居ない研究所って何ですか、驚きました」、「もう本当に日本には未練が無いので、米国に渡りそこに永住するつもりです」等々、当社への不満は元より、親や日本への不満の文句タラタラでした。

で、まあその人のあいさつが終わって、参加した社員の反応は、ただ拍手でした。誰ひとり反論するわけではなく、それ以前の穏やかなお別れ会と全く同じ、判で押したような拍手、それでお開きになりました。それ以後会社でその派遣さんのことが話題になることはありませんでした。仮にその人が将来何らかの理由でテレビや新聞に載ったとしても、誰も思い出さないでしょう。

私もこの小さなエピソードをそれ以来忘れていましたが、先日「会社とは何だろう」と言う哲学的な問いを考えた時、言葉を万個並べるよりも、このしょうもないエピソードが会社の大きな一面を語っているのではないかと、ふと思い出したわけです。会社は賭場です。金の欲しい奴が儲けるためにその時だけ集まる一期一会の場です。上からの指示にはバカバカしいものも多いのですが、じきに考えることすら忘れて言われたとおりに片付けて忘れるようになります。そして送別会もその1つに過ぎませんでした。

この前も出たから今回も出て、型どおりに式典をやって忘れただけです。その派遣の若者はあるいは普段からの憂さやうつぶんを晴らしたつもりかもしれませんが、どっこい万年社員の方がより上手で、あるいはずっと愚かで、聞いていないし何も感じない。

鬱憤など一つも晴らされていないのですよ。単に一仕事つつがなく終わっただけでした。仮にこれが誰かの葬式だったとしても同じことでしょう。

こう書いている私も、この下らないエピソードをおそらく2度と思いたさない事と思います。と言うか会社のこれまでの数十年、すべて既に忘却しています。

14、型について

欧米的一神教的世界では、世界観は教理によってガチガチに固められており、入信するか否かはその既成の型に自分を捻じ曲げてはめ込めるか否かと言うことなのだが、精神性が高くアニミズムの基礎を持つ東洋的多神教の世界では、自然と共感することが重要であるもののそれに至る道は自由多様であって、自由度の非常に高い世界である。

ところがその自由度の高い東洋、特に日本にあって、悟りあるいは自然と一体になる方法である「道」については、華道、茶道、武道、芸の道等々非常に型にうるさい。これらの道に入るにはまず先輩や師範の型をまねる事から始めないといけない。時には学び終わっても型から外れることを許さない。これはせつかく間口の広い東洋にあって、あたかも一神教が如きのような魂の自由の不当な制限ではないだろうか。

例えば歌舞伎の世界、基本的に家系による伝承であり、子供のころから親に付いて、型をひたすら学ばされる。型を覚えてからでないと自分の解釈を付加することはできないし、その付加も従来の伝統の範囲内でしか通常許されない。先代の中村勘三郎や市川猿之助は結構新しい試みをしたと一般大衆には人気だが、本来の伝統歌舞伎のお歴々の感想はどうであろうか。華道にしても、何を前に何を後ろにと決められていて、例えば「花ことばで並べたい」と言っても許されない。

型が存在する一番の理由はおそらく、東洋文化の間口の広さそのものにあるだろう。つまり広すぎて何でもありだと、物事が発散してしまつて、收拾がつかなくなるのだ。しかも無手勝流のほとんどは、美しくもなければ精神性も無いものに終わってしまう。だからこそ無駄を避けるために、あるいは天才的な先人が見出した高い美を絶やさないうために、つまり一種の親切として型があると言う解釈である。

私もこの意見に賛同はするが、ここに素朴な疑問が生ずる。もし芸術すべてが既存の型からしか入れないとしたら、その既存の型はどうやって形成されるに至れたのであろうか。始めのない鎖のその始めを問うているのである。「もしハンセン病がうつらな

いなら、どうして患者が居るのだろうか」と言う素朴な問いと同様である。型をとある天才が始めたのなら、もしその天才が現代に生まれたら、せつかくの才能は持ち腐れで、型にはめられるだけの不幸に終わってしまうのであろうか。

欧米人の話になるが、かつて稀代のチェス王にボビー・フィッシャーと言う人がいた。何連勝も王座を守った天才で、その天才が至った結論は、「今のチェスのルールは面白くない。私が発明したルールの方がよっぽど面白い」と言うものだった。そして彼は即座にチェス界から永久追放された。要するに異端扱いで破門になったのである。これが中世だったら火あぶりになっていたことだろう。わびさびの心を知る我々東洋人が、欧米人と同じであって良いはずがない。

そこで私は思うのだが、先ず原則論として個人の自由、これは宗教や文化に拘わらず最大限に保障されなければならない、最大の基本的人権である。但しこれには保留が付いて、「他人に迷惑をかけない限り」と言うことだろう。そしてこの大人の自由が最大限に許される素地があるのが実は東洋文化の素晴らしい所であるとするならば、例えば人に見せて鑑賞料を取ると言った公的行為においては型を守るのは止むを得ないとしても、個人が個人の範囲内で自分の楽しみとしてやる場合には、めちゃくちゃや猛烈に美しくない場合も含めて、型にとらわれずに自由にやって良いと思うのである。自由と早道を両立したい人は、途中まで師範について型を習い、納得したところで離れれば良い。

最後に断っておくが、何事も「情熱に始まり形式に終わる」と言う悪しき法則宜しく、この東洋の型が現実には多分に形骸化して、世間様の目とか虚栄や上辺の繕い等、愚かな自由の剥奪につながっている現状がある。これには断固として立ち向かい、阻止しなければならない。自由は昔から転がり込むものではなく勝ち取るものなのである。

最後に型と言うものあるいは教えと言うものを、本来の意味で継承することを実践した偉大な先人として、高僧の一休宗純（とんちの一休さん）を挙げたい。彼は仏の教えには形式的に逆らって、酒も飲み肉も食らい、女まで囲ったが、名刹大徳寺の住持を長く務めたように、実は仏の教えの本質に従った、実に革新的な、そして真の型の継承者と言えるのである。

15、自由賛歌

人が生きていくのに大切なものはいくつか挙げられる。「衣食住」、これは基本だ。更に「生まれること」、これはもっと基本だ。「喜び」「やりがい」、これらは生きる価値の基本だ。でも、これらの大前提にある根本のもの、それは「自由」ではないか。私は東洋文化至上主義者ではあるが、残念なことに、こと自由に関する限り、欧米キリスト教徒たちの方が進んでいる。そして東洋では個人の自由を「わがまま放逸」と捉え、「家」とか「血族」とか「義理人情」、場合によっては「世間体」なぞを上位に置く傾向が強い。

人はなぜ生まれてきたかと言えばそれは生物的にだが、人はどう生きるかと言えばそれは「幸せを追求するために」生きるのである。これすらも否定する議論が東洋や独裁主義にはあるが、もつてのほかである。ひとは誰でも本能を以て生まれてくる。そして本能は基本的に善であって、本能通りに育てば素直な人になる。そして素直に育った人が一番喜ぶのが、「自由」と言う状態である。自由が、自然な選択肢を選ぶことができる能力だからだ。ただ、本能通りに育つと言うことが、自由度が高すぎて効率が悪く、しばしばダッチロールしやすいために、ここに親切としての教育が存在する。呼吸は誰にでも出来るが、歩き方や泳ぎ方は教わった方がはるかに早い。ここに教育と型の存在意義があるが、ここで重要なことは「強制しない」こと、つまりその教育や型を受けるか否かの選択権はあくまでも各個人にあるということだ。だから自己責任において型を拒否しても良い。

世界を見るとしばしば特定の目的のための偏った「教育」が見られる。しかもそう言うものに限って強制だったりタブーだったりする。だから教育を受ける側にとっても、素直な自分に照らして、その教育が本当に適切であるかを随時検討すべきである。そしてその検討は再び「自由」が保障するのだが、悪いことに「特定教育」を受けた人はその自由すら失っている。これではほとんど「カルトの被害者」だ。これは良くある悪循環であり矛盾である。だから意図的な情報操作に騙されない基本はこれまた自由であるのだ。自由は全ての基本であり、勝ち取るものであり、全ての始まりであり、最大の喜びである。あとは使い方に気を付ければ良いのだ。自由の行使には「他人に迷惑をかけない限り」と言う留保が付いている。

世界史の大きな流れは自由を獲得する戦いであった。その間に「自由・平等・博愛」と総括されたこともあった。また、キング牧師やマンデラ大統領の戦いも、本質は自由を求める闘争であった。これらからも人々の自由を希求する熱意が理解できる。もちろん自由の行使は各個人の裁量であるから、究極には「束縛を求める自由」も存在する。であるにもかかわらず「自由を求める束縛」はありえないことに注意して欲しい。自由は最大の選択権の保証である。では現にある束縛、会社とか国家権力とか教育

とかある種の宗教とかは悪なのか。そう、必要悪であって、出来るだけ無い方が、あるいは控え目で拒否できる方が良いのだ。

自由が最大限の選択権の尊重であるならば、どうしてこれが融通無碍な東洋に定着せず、逆にイデオロギーの欧米キリスト教世界で先ず定着したのか。これはキリスト教が宗教として低いためである。理屈のみでほとんど精神修養が無いために、個人や自由の尊重や、民主主義や博愛主義と言ったほとんど道徳レベルの項目が目の目を見たのである。東洋のアニミズム的宗教にも自由はあるのだが、より高い精神的な教えに隠れて、しかもそれが高いがゆえに形骸化した愚かな型に抑えられて、見えにくくなってしまったのだ。「死ぬことと見つけたぞ」と看破した武士道でさえ、その悟りは「自由に生きる」と言う正調を基本とした破調であることに留意して欲しい。

日本の一番悪質な強制、自由の束縛に「親孝行」がある。これが東洋でことさらに強いのは、東洋的イデオロギーである儒教の影響であるが、それにしても養子縁組はもとより離婚や同性婚等が次々に市民権を得ていく中にあって、なぜ親孝行だけが依然として不動なのか。世の中にはダメな親、最低の親も沢山いるのに、親孝行だけはなぜかなくなる。日本人が大和魂を回帰することを促す正統な月刊誌「正論」ですら、旧来の血縁家族の復活を説いている。これでは単なる復古趣味、歴史の逆回転ではないか。謙譲の心やおもてなし、見返りを求めない親切等を主柱とする「クールジャパン」、これは現状の欧米流の効率至上主義に代わって21世紀の世界標準となるべき、極めて高い精神性であるが、個人主義の前提が無ければ再び過度の精神主義に陥る危険性があるし、異文化である世界に発信できなくなる。異文化同士の理解もその基本は個人の自由の尊重にあるからだ。

日本は入れ替る四季の美しさ、自然の豊かさに抱かれた国で、嬉しさのある、柔軟な心を育ててくれる、「ジーンとくる」風土がある。そしてこの柔軟な風土が生んだ精神が「和魂洋才」だ。和魂と洋才は互いに矛盾するのだが、矛盾は悟りに通じるものであり、この柔軟さで日本は今までも成功してきた。そしてそうやってきた今、「自由は和魂の側でなく洋才の側にある」ことをはっきりと認識すべきである。クールジャパンの基礎は自然に感謝すること、環境の恵みに思わず手を合わせてしまう「身にしみる思い」を体感することが基本だが、これは机上で学習することやイデオロギーではないので、どうしても体感できない音痴な日本人も居れば、異国にあってもこの良さを体感できる感性豊かな外国人も居る。そういった外国人にクールジャパンの伝道師になってもらう、今がチャンスなのだが、その前提は「自由」が洋才の側にあって、全ての人権の大元であることを、我々日本人が明確に自覚することにある。

16、真央ちゃんと竹田さん

明治天皇の玄孫の竹田恒泰さんが、「オリンピックは勝つために行くものだ。金メダルを取れなかった選手にフォーカスしているメディアもおかしい」と発言して、人々の猛反発を食らっている（オリコン2月28日配信）。番組で名指しはしていないものの、浅田真央選手が念頭にあったのは明らかで、対談したカンニング竹山等は「真央ちゃんは2回目にあれだけの偉業を達成し、我々は多くものを学び感動した。大切なのはメダルの数ではない」と反論した。この記事に関するヤフーのコメント欄も、多くが竹山支持のコメントだった。

私も竹山氏支持であり、また多くの名もない日本国民が「メダル以上に真央ちゃんに感動した」と表明しているのを、大変頼もしく感じた。要するに真央ちゃんは「あっぱれ」だったのである。彼女は世界に向けて大和魂を、武士道を、そしてクールジャパンを発信したのであり、それについて日本人の大半も「大切なのは順位と言う数字や結果ではなく、どんなときにもベストを尽くすと言う潔い心構えだ」と情理で納得したわけである。このあっぱれは、我々日本人が神社に詣でるとか、初日の出を拝む時に感じるのと同じあっぱれであり、自然を崇敬する日本人の奥深い心情の発露である。

かつて書いたが、明治維新の最大の成果の一つは、それまでは1割に満たなかった武士階級の所有物であった武士道が、全国民の共有物となったことである。この潔い心構えによって日清・日露の大戦にも国民総当たりで勝利を挙げてきたのである。つまり真央ちゃんがソチで我々に与えた感動は、100年前に日本人が困難な戦いに勝利したその感動と同質のものなのだ。「大切なのは上辺の結果ではなく、過程での心構えだ」、クールジャパンを一言で総括すればこうなる。だからおもてなしと言う見返りを求めない親切があり、美しい工芸品や芸道の数々があり、落としたお金も戻ってくるのだ。そして心ある日本鼯眞（ひいき）の外人の感動もこの心構えにある。

では竹田氏のコメントは全くの的外れだったかというと、私はそうは思わない。竹田氏のコメントは「そうは言っても結果をまるで無視したら危ないよ」と警告しているのだ。武士道は素晴らしいが、場合によっては過度の精神主義に陥りやすい。そのところを竹田氏は警告しているのではないか。

ソチでの日本のメダル獲得数は8個で12位だった。近隣ではロシアが33個で1位、米国が28個で2位、中国が9個で11位、韓国も8個で12位である。冬季と言う特殊性はあるものの、この辺が世界の国力の実際の、客観的な指標であろう。この観点からは、明治維新から間もない日清・日露両戦争の勝利はむしろ出来過ぎと言うべき

である。そしてもしこの出来過ぎについての無反省が、大東亜戦争の敗北に繋がったと考えることもできる。であるならば、「もし日露戦争後に竹田氏のような客観性のある見方が日本人にあったならば、無謀な大東亜戦争への突入とその敗戦には至らなかったのではないか」とも思えてくるのだ。総括すると、ここでの竹田氏と竹山さんらのやりとりは、単にソチに留まらず、今後の日本人のありようについて大きな示唆を与えているように思える。

つまり今後のグローバル社会、特に物質文明の20世紀に対し精神文明が強調されるべき21世紀に於いて、その指導的役割を演じ得る「クールジャパン」、この心構えを未来に向けて持つためには、「真央ちゃん9割、竹田氏1割の心構え」がその方向になるだろうと私は確信する。どちらが無くても危ういことを、この「真央ちゃん事件」は教えてくれている、私にはそう思えるのだ。ちなみにヤフーのコメント欄にも少数ではあるが、「竹田氏の意見を一方的に封殺するのは返って危険だ」と言うコメントも散見できた。これまた「今の日本人は健全だ」と、私に思わせる。

17、日本人キリスト教徒

次の話を読んでどう思われるだろうか。

「私たち夫婦は子供が欲しいです。男の子を希望しています。でも生んでみないと性別は分かりません。だから貧しい国から男の赤ん坊を養子に取ることにしました。」

この話は実際にあった話で、しかもそのコミュニティでは美談として称賛されている。そのコミュニティとはキリスト教会だ。

我々日本人がこの話を聞くと違和感を覚える。意思決定の過程が自然でないからだ、と言うか明確に人工的だ。しかもコミュニティを挙げて称賛されていると言うことは、そのコミュニティが集団マインドコントロールに罹っていることを意味している。要するにカルトなのだ。それにしてもこの話は実に巧妙に出来ている。この手の業界に良くあるように、ただ神に奴隷のように従ってはいないかのようなのだ。自分たちの意思を前面に出して、あたかも信徒の自由意思が生きているかのように装っているが、その実中身は教団の教理という人工物の全くのデッドコピーなのだ。「称賛を狙ってやっているのではないか」と疑いたくなるほどだ。

この手の不自然さは日本のその業界にも等しく、いやもっとゆがんだ形で存在している。私はかつて「親の代からキリスト教徒」と言う男を部下に持ったことがある。その男が何とも不自然の塊なのだ。とにかく魂を抜かれたようになっている。生気がないのだ。教理が禁止の塊だからだろう。さらにやりたい事ややりたくない事が一々他の

瞑想録（その1）

人々と違う。自己主張をしない風の巧妙な自己主張を平気で行う、いわば8重人格なのだ。つまり自己を押し殺しているだけで本当に死んではいけないので、さも正義の主張を装って自己をぐりぐり出してくる。ずるい。さらに「地上の権威には属さないぞ」とばかりに、あるいは「職場も伝道の間だ」を実践しているつもりだろうが、やり方をわざと教会風に曲げてくる。私はこの男が一番に「2度と会いたくない奴」だ。私をけ落とした奴よりももっと会いたくない。一言で言って不潔なのだ。

私はこの不自然さがこの男の個性に過ぎないとは思わない。それ以外にも何人かの自称キリスト教徒を知っているが、大抵似たり寄ったりだ。一貫しているのは明らかに偽善者だと言うことと、精神修養の類が全く出来ていないと言うことだ。精神修養のない宗教って、「腐ったものしか売ってない食料品屋」みたいなものだろう。宗教はそもそも精神修養のためにあると思うのだが。でもこの業界にあるのは書かれた聖書の聖書信仰と、その字ヅラを文字どおりに墨守する、ロボット人間と言うゾンビの群れなのだ。

「日本におけるキリスト教伝道は完全に失敗した」（中沢新一）。

さすがは当世第1級の宗教学者の中沢新一先生、おっしゃることが実に歯切れが良い。過去完了形でバツサリと切り捨てている。この先生もキリスト教の家に育ったので、その不自然さや汚さを身にしみて知っているということだろう。もちろんキリスト教の隠れた野望を見抜いてこれを禁止した、豊臣秀吉や徳川家康と言った優れた先人たちの英断には恐れ入る。これらの英断があったからこそ日本は今でも独立国なのだ。同じくアジアにあっても、キリスト教に転んでしまったフィリピンや、同じく一神教のイスラムに改宗してしまったインドネシアやマレーシアを思う時、今の日本や大和魂が残ったのはこれら先人のおかげであると言える。

だが、こと現代の状況をみると、「グローバル化」と称して土足で入ろうとするこれら一神教に対して、ことさらに禁止しなくても、日本人は無名の庶民に至るまで、これらに打ち勝つ自然な魂を持っているように見える。これは大いに心強い。そしてこれら論理集団がこれからも日本に根付かないだろうことは、上記した「向こうに転んだ奴らの不自然な態度」が、言わば「反面伝道」になっていることから首肯できる。40年ほど前には学生運動と言う、やはりイデオロギー、共産主義と言うキリスト教の変種に侵されかけたことがあったが、見事に立ち直っている。

ではこれらの巧妙な理屈の押し付けに打ち勝つ日本人の心とは何であろうか。それはこのアジアの四季自然の豊かさに恵まれたことに発する、アニミズム的な自然を愛する心であろう。この四季自然、それに育まれたわび・さび等の深い情理と優れた芸

術の数々、更に「生きているのではなく生かされている」と言う実感から帰結される相互扶助と憐みの心である。世界中でお金を落としても戻ってくるのは、誰も見ていなくてもまじめに仕事をするのは、大事なものは数で表されないと心から思っているのは、おそらく日本人のみではないか。日本人は情理が論理に打ち勝つことをDNAとして知っているのだ。

と言っても私はキリスト教徒や一神教の信者を憎んでいるのではない。むしろ憐れんでいるのだ。この美しい四季自然に囲まれながら、山や滝や稲や湖や神社に思わず柏手を打ちたくなるような感謝の念が湧いてこず、ひたすら薄っぺらな屁理屈にうつつを抜かして良いことをしたと思い込んでいる、この鈍感さに、私は憐れみ以外の何も感じない。確かに世の中には勘の悪い人や頓珍漢な人は結構居るものだ。2年たっても湯切り一つ出来ないラーメン屋の店主とか、5年たってもかな一つ使えない大工見習いとか、恐ろしく勘の悪い人は我々の身の回りにも居るが、でも彼らに罪はない。生まれつきがかわいそうなだけである。

最後にそう言うかわいそうな人々に一言言いたい。神道や大和魂の側からは、「キリスト教徒兼神社の氏子」はOKなのだ。そっちの教理はかたくなに拒否しているかもしれないが、我々のドアは常にオープンである。

18、猫とクレタ人

「シュレーディンガーの猫」と呼ばれる逆理がある。概略はこうだ。量子力学の世界では全ての事象は確率であると認識されている。例えば核改変も全くの確率事象だ。そこで核反応の先に青酸ガスボンベを置き、改変で α 粒子が出た時だけボンベが開くようにして、その先に猫の入った箱を設置する。ここで α 粒子の発生確率が 0.5 になる間だけゲートを開けた。さて猫は死んでいるのか生きているのか。

ミクロの世界では「波動関数の重ね合わせ」が概念できるので、 α 粒子が「0.5 個出ている」と言うことが考えられる。ところがマクロの世界では猫や石が「0.5 匹生きている」とか「存在と非存在の重ね合わせである」などと言うことは常識がとても受け入れられない。だからこの猫の話は逆理になるのだ。

この話を良く読んでみると、この逆理は一見物理学に見えながら、実は常識の問題だと言うことが分かる。もし人が「半存在」を常識としていれば、この問題は逆理ではない。逆に我々はミクロの世界に常識を持っていないだけで、実はミクロの世界でも「半存在」など無いのだと強固に思う人にとっては、「現代物理学は誤謬かもしれない

が、逆理は存在しない」のである。更に東洋哲学では「真偽一如」と言うように「対になるものは正反対でなく一対だ」と言う悟りがあるが、覚者から見れば「存非一如」であって、「有るとか無いとかこだわること自体が執着」と言う答えになる。

続いて「クレタ人の逆理」と呼ばれるパラドックスを取り上げよう。「嘘つきの逆理」とも呼ばれる。内容はこうだ。ある人が「私は嘘つきだ」と言った。もしこの人が本当に嘘つきならば、先の言明も嘘になるから、実は正直だったと結論される。だがもし実は正直だったとすると先の表明は真と言うことになり、この人は表明通り嘘つきと言うことになる。いずれにしても矛盾してしまうのだ。つまり逆理である。

この逆理の本質は「1回ひねり」である。1回ひねってあるために、論理を回転させるたびに逆が出るのだ。似たような「1回ひねり」に「メビウスの帯」がある。トップの画像のような帯で、途中で1回だけひねってある。おかげで裏面が、帯を一周すると表面になる。つまり「裏か表か」が言えないのである。言えないのだが科学の世界は「だから逆理だ」とは言わない。単に裏表が区別できないだけの変わった曲面として認識できる。現に目に見えるからだ。

ならば「嘘つきに逆理」だって「単に真偽を越えた表明」あるいは「半真半偽な状態」と思えばそれで済むのではないかとも思うのだが、これができない。科学を築いてきた欧米一神教徒にとって真偽は絶対神と同じく絶対であって、決して譲ることのできない、たとえハルマゲドンで宇宙が滅んでも譲れないことなのだ。もちろん東洋的には真偽一如であって、真偽に拘るのが既に執着なのだが、これを言ったら科学ではなくなる。ここでも逆理の本質は常識のありようであって、科学の本質には無いことが分かる。

実際多値論理を導入すれば、「真でも偽でもない」状態は認定されるので、「嘘つき」は逆理でなくなる。一例として「AはBを作り、BはAを壊す」と言うシステムを考えてみよう。これは「嘘つき」の分解に当たっている。AやBは砂山みたいなものだと思えば良い。すると多分、「AもBも半壊れである」と言う状態で落ち着くだろう。一種の多体問題だ。ちょうどメビウスの帯と同じく、「1でもなければ0でもない」状態なのだ。例えばメビウスの帯だって、帯を多数つないで、その内偶数枚だけひねれば、帯を一周して戻ると表は表のままである。だから「嘘つき」だって、「大抵嘘つきな人がふと正直になった」「大抵正直な人がちょっと冗談を言った」と解釈すれば逆理ではなくなる。

ところが困ったことに、多値論理を認めると背理法が使えなくなる。背理法が使えないと例えば「素数は無限にある」と言った簡単な定理すら証明できなくなってしまう。だか

瞑想録（その1）

ら「科学の功利主義」の立場からは、「嘘つき」を逆理のままにしておいて背理法を生かす方を選ぶのだ。

さて、量子力学と並んで非常識な相対論、これはどうであろうか。時空が縮むのだ。くにかくにや変形するのだよ。どうしてこれを頭の固い欧米人が逆理とせずには是とするのであろうか。それは「身近なところでは伸び縮みは目に見えないほど小さい」と言う合理化論理をかませることができるからだ。論理の列で繋がりさえすれば欧米人は安心してそれ以上詮索しない。ただ、「何が伸び縮みするのだろう」とあくまでも物質的に考えたい人は居て、「エーテル」などと言う仮想のブツを想定の上で理解している人たちも多い。それと相対論が量子論に比べて都合良かったのは、その約300年前に、「平らだと思っていた地球が実は球だった」と言う逆転で、この手の問題に慣れていたことだ。

以上見てきたように、逆理とは科学に対する挑戦と言うよりは常識に対する挑戦なのだ。見方を変えれば逆理は、悟りに至る公案として、東洋ではむしろ珍重されうと言うことだ。「犬に仏性はあるか」、これは非常に有名な公案であるが、「ある」と答えても「ない」と答えても矛盾を生じるようになっている。ちょうどパリサイ人がイエスに「税金を納めるべきですか」と尋ねたのと似ている。今のキリスト教とは程遠く、イエスさん自身は多分に禅師だったのだ。

なお、最後に断わっておくと、逆理が禅問答のすべてではない。例えば「隻手の音声」（拍手の片手の音を聞け）、これは逆理ではないが公案である。公案のなぞ解き、つまり合理化をしてネタばらしをしてしまうと、せっかく論理脳を殺すために存在している公案の価値を貶めてしまうので、本当はネタばらしをしてはいけないのだが、こちらの公案は「うちに鶏は居ない。で、白い鶏は何羽居るか」と同様の問いで、答えは「非該当」あるいは「ナンセンス」なのだが、ナンセンスにこそ深い意味があるのが東洋文化である。

19、ムーンライト伝説考

「ムーンライト伝説」という曲がある。かつて大当たりしたアニメの「美少女戦士セーラームーン」のオープニングテーマとして歌われた曲で、発表からもう22年も経つ。その歌詞がなかなか深いことに最近気づいた。

全体として片思いの乙女心をうたったファンタジックな歌詞なのだが、単におとめチックに留まらない一種の哲学、神秘を有している。第一に言えることはこの歌詞が我々

瞑想録（その1）

日々日常の地べたから抜け出せない者にとって、雄大な飛翔とも言えるスケールの大きさを有していることだ。実際この歌詞は、地球上あるいは銀河系を含むこの宇宙の、どの法則にも縛られていないのだ。

出だしは、「ごめんね、素直じゃなくて、夢の中なら言える・・・だって純情どうしよう、ハートは万華鏡」。この部分は、「夢と現実が実は裏表ではなく同一だ」と言う、ヨガの悟りを想起させる。そして「純情な心は万華鏡」、万華鏡はちょっと初等幾何に過ぎる所が気になるものの、どこまでも反射して無限に続く、調和した世界を連想させる。仏教の一派である華嚴宗の究極のようであり、それ以前以後の歌詞も含めると阿弥陀如来の住む西方浄土を連想させるのだ。

そして1番のサビの部分、「月の光に導かれ、何度もめぐり合う」。人類にとって太陽は命を与え、月は運命の骨太の部分（陰陽の周期）を与える。その月の光に運命的に導かれて、私と彼はめぐり合うのだが、めぐり合うのは偶然で、基本的に一期一会で有る筈なのに、「何度も」つまり無限回の偶然で無限回めぐり合うのだ。ここまでいけばむしろ必然ではないかとも思えるのだが、あくまでも偶然なのだ。だからファンタジーなのだ。だがここの議論はもう一面あって、物事が必然か偶然かは、量子力学においても、そして仏教等東洋文化にとっても、共通に重要なテーマなのだ。このテーマに対してこの歌は一つの解を提示している。

続いて1番の最後の部分、「星座のまたたき数え、占う恋のゆくえ」。星座はもちろん人の運命を直接つかさどる。しかもこの歌詞によるとその影響はまたたきの数ほど偶然でしかもはかないのだ。そしてまたたきも何度ものめぐり合いも、いずれも波動である。波動は物理学の根本であり、かつ質点の運動に比べてまだ解明されていない、神秘的な現象なのだ。「同じ地球(くに)に生まれたの、ミラクルロマンス」。同じ星に生まれるのが、これまた奇跡的に偶然なのだが、あたかも前世からの決まりであるかの如く必然でもあり運命でもあるのだ。偶然と運命についてここでも問いかけている。しかも「同じ場所」が地球と雄大だ。対極に宇宙全体と言う神の国の雄大さを暗示している。これがミラクルロマンスでなくて何であろうか。

2番に行こう。「・・・現在過去未来も、あなたにくびったけ」。1番では地理的雄大さ悠久さを表現したのに対し、2番では時間的雄大さ悠久さを表現している。しかも、過去が確定しているのと同様に未来にも等しく確定しているのだと宣言している。これは「未来は不確定」とする物理的世界観や神感に対する堂々たる反抗、異議の提示である。新たな未発見の法則の存在を暗示している。歌詞は「幾千万の星から、あなたを見つけられる」と続く。「藁の中の一針」もたやすく見つけれられる自信があると言うの

だ。数学的な確率論では不可能だ。だからこれは人知を超えた直感、超能力によってということだ。これは人類が更に進化した時に得る能力は、更に頭脳明晰になることではなく、脳波の検知、直観力であることを予言している。確率論と言う無知から真の智への移行である。

2番のサビは「不思議な奇跡クロスして、何度もめぐり合う」である。本来の運命的な奇跡とは、実は時空の中で絡み合っているのだ。これも偉大な気付きである。地べたに這ってデータ取りに忙しい科学者たちにはとても及びもつかない世界だ。実際、こう言う気付きこそが「宇宙の大いなる真実」なのであり、仏教の悟りやアニミズムの「生かされ感」そのものなのである。雄大であると同時にこの上なく繊細である。そして思うのだが、世の中の究極の物理もかような格好をしているのではないか。

この歌は「信じているの、ミラクルロマンス」で終わる。もし宇宙の本質がミラクルロマンスでないとしたら、我々は何のために、何を楽しみに日々生きているのだろうか。例えばコストダウン、会社の研究としては金になるのだろうが、こんなつまらないことのために我々は生きているのだろうか。やはり心から求めるのは雄大な宇宙時空の、ミラクル+ロマンスではないか。この歌はそのミラクルロマンスの素晴らしさを、私に再認識させてくれた。

20、太陽と月と星と

「私とは何か？」「私は何のために生きるのか？」、アンパンマンの歌詞みたいだが、そもそも哲学とはこういうことを考える学問だ。「私は私だ」、これは旧約聖書でアブラハムの「あなたはどなたですか」と言う問いに対し神が成した答えだが、分かるようで分からない。「契約は契約だ」と同じで、論理的説明になっていないからだ。分かる人にしか分からないのだ。

私のような俗人はこの質問を、「温泉まんじゅうとは何か？」「温泉まんじゅうは何のためにあるのか」と置き換えても同じ、問題の質もレベルも答えも変わらないように見えるが、哲学者にとってはそうではないらしい。その理由の一つに、自己引証の無限ループがあるようだ。現在の問いはより正確には、「『私とは何か』と考える私とは何か」と言う問いなので、「分からない物は分からない」になってしまい、どんどん迷宮の蟻地獄に入ってしまう。

だからここは知恵で、無限ループの外に回答を求めることになる。欧米系の著名な哲学者デカルトは、この問いに対し長い黙想の結果「我考える故に我あり」(Cogito ergo

sum.)と言う回答を導出した。この回答に論理的矛盾はない。ちなみに対偶を取ってみると、「私は存在しない、だから考えない」となり、全く問題ない。だが我々東洋人はこの宣言に違和感を覚える。その理由は、存在の根拠に「考える」を採用している点にある。例えば「食べる」とか「遊ぶ」とか、人が行為する他の選択肢を選んでも矛盾はないのだが、デカルトはあえて「考える」と言う人類の特権を回答に採用している。この回答の根っこに東洋人は、「人は神から自然や環境全てを支配する権能を与えられた」とするキリスト教的世界観、つまりある種の傲慢を感じ取るのだ。

100年ほど前の明治中期に、藤村操と言う名の日本人学生が居た。彼は人生哲学、特に西洋のそれにはまりすぎて頭が変になり(他の諸説あり)、ついに華嚴の滝から飛び降りて自殺してしまった。彼の哲学的問いにはおそらく、「私とは何か」「私は何のために生きているのか」等もあったことだろう。これらの問いが哲学の始まりだからだ。しかし、実は彼が哲学を始めた時から彼の死は予定されていたのではないかと思えるのだ。西洋哲学の本質は抽象化にあり、その抽象化によって問題は現実を離れて空論化するところ、空論に真摯な答えを求めるのは原理的に不可能だからだ。だから「私とは何か」の問いには、デカルトほど鈍感でないとその行きつくところは死なのだ。

私も日本の美を知ってから後に、初めてこの問題を、東洋の心で禅の公案として長い間瞑想した。その結果私に与えられた答えとは、「我生かされる、故に我あり」だった。自分で、自力で、自発的に生きているのではなく、天や自然や大いなるものに生かされ、共生しあい助け合う所に私の依って生きる所があると言う、まあ一種の悟りだ。そして更に、「太陽は命を与え、月は運命を与え、星は運勢を与える」と言う回答も天から下って来た。人はこれら大いなるものの奇跡と躍動によって、言い換えれば偶然と言う必然によって生かされていると言うわけだ。

どうだろうか。賛成する人もそうでない人も居ることだろう。私自身まだ瞑想の最中なので、まだ結論めいたことは言うべきではないのだろうが、今日これまでの気付きを取りあえず集約するために、ここにまとめた次第である。

21、どうでもいいや

無門関のいくつかの公案を読んでいると、なかなか面白い。例えば「犬に仏性はあるか？」の答えは「無(バカ野郎)」であり、他方「庭のビャクシンの木」には「全宇宙が詰まっている」と言う。「犬と木でそんなに違うものなのかね」などと思っていたら、ふと、「別に有ったって無くたって、どっちでも良いじゃないか」と言う気になってきた。と言うか、一皮むけて、「有るでもなく無いでもない状態」が他の常態に比べて妙に心地よく、

瞑想録（その1）

また妙に座りが良いと感じるようになったのだ。その気持ち良さは「悟った」みたいな激震と言うよりは、あたかも草津温泉に浸かって「良い湯だな」とでも言っているかのような感じなのだ。

自分でも不思議だけれど、「有無を達観した」ことで角が取れたように思う。端的には理屈を言わなく、また追い求めなくなった。もちろん物事に理屈は有る。酢が酸っぱいのは酢酸が酸性だからだ。酢酸が酸性なのはカルボキシル基のせいだ。こうやって行くと深く掘るだけ知的興味は満足するだろうが、永遠に理屈を掘れるわけでもなく、また仮に掘れたとしても、そんなことはどうでも良い、取るに足らない、本質の無いことに思えるのだ。言わば好奇心が良い意味で蒸発してしまった。好奇心が無いと、職業としてならともかく、発見はありえないことになる。科学とは縁が切れたかのようなのだ。特に論理学や西洋哲学とは背反になっている。

目の前に新聞がある。最近の日本や世界の出来事が、さも大変そうに、しかし淡々とつづられている。だがこれらの記事が以前のように興味をひかない。世の中がどう変わろうと小さなことに思えるのだ。まるで腑抜けになってしまったかのようなのだが、脂ぎってもいないようにも思う。紆余曲折はあってもいずれは全てが元の鞘に収まる、そんな確信があるのだ。これはもう法則と言っても良い。全てが「一如」になって、丸くなっている。

ただ、ひらめきは有って、何となくほんわかした、柔らかい気付きがボワーンとやってくる。「遠い眼の先に蠟燭の光がふと見えるかのようなのだ」だ。「片手の拍手の音」も聞こえるような気がするし、「門の無い関所を入れ」と言われれば入れるような気もする。犬に仏性が無かろうが、ビヤクシンに大宇宙が収まろうが、全然構わないのだ。自分自身の中に山ほどのご神木や八百万の神々が全て住んでいるようにも思える。ただこの状態が永遠に続くのか、今一時なのか、どうにも分からない。もし一時であってかつ忘却してしまうともったいないから、今ここに記録しているようにも思える。

困ったのはこういう至福の状態に至っても、腹は減るし夜は眠くもなること。トイレに行かなくても済むわけでもない。衣食住から無縁と言う訳にはいかないのだ。だが大抵のことが仔細なことに思えて、どうもこういう状態は日々の生活には不向きのようなのだ。これが目下の所の最大の問題、瞑想の最大の課題である。そしてこの課題に回答の存在は保証されていない。これすら有っても無くても良いのだろう。あたかも夢の中にいるようだ。そして「稼いで来い」と嫁さまに蹴り出された時に、きっと夢から覚めるのだろう。

22、虚な宇宙へ

その時突然に天が開け、地が鳴り、私は大いなる力を感じた。それは天使のラッパのようでもあり、また悟りに至ったシャカの喝のようでもあった。その力によって私は此岸から彼岸へと、奈落を越えて渡った。それはあたかも無限を一足飛びに越えるかのようで、およそ人知の及ぶ所でなかった。

彼岸にわたると、それまで私の周りにあった全ての物が溶解し始めた。塊がどろどろと溶けて流れ落ち、落ちながらも発光して波動となって拡散伝播していき、ついには全てが蒸発するかのようであったが、それでも永遠にとどめを知ることはなかった。

私はそこで私を待っていたある覚者にその意味を尋ねた。覚者は答えた、「この愚か者が、彼岸に至っても猿の知恵のような概念化と認識論でしか物が見えないのか」。その通りであった。生まれ故郷の日本の文化の根本は「ありのままに見る」であり、私はその伝道者を自任していたのだった。

覚者はさらに続けた、「お前は先ほど虚数空間にワープした。実数空間での粒子の運動量は彼岸では虚数化して波の波数ベクトルに実体化するのだ」。そうであった、波とは虚数化した粒子なのだ。だが私には素朴な疑問が生まれた。

私は覚者に、「でもここで拡散伝播していく波は、ちっとも形が整っていませんが」と尋ねると、覚者は再び「愚か者が、お前は波長と振幅と位相だけで決まる、単なるデジタル波しか頭に無い」と再び私を軽蔑した。だがこの言葉は私にとっては公案のようであった。この言葉で全ての疑問が氷解した。真の波が正弦波のようにきれいで出来過ぎている方がおかしいのだ。私にはアナログ波が「見えた」。

「では伺います覚者よ、真の波がそのままに実数空間に戻るとそれはもはや粒子ではないですね。」「そのとおり、それは連続体になる。そして連続体こそが生きる者の魂を死の滅びから救い得るのだ。死の根源は粒子という幻想だ。」「覚者よ、しかし虚数は実数を前提とした、言わば破調ではないですか。とすれば波は粒子の二次的姿でしょうか？」「無。」

私は最後に尋ねた、「覚者よ、あなたは一体どなたですか？」 覚者は自らを顕現させた。それは白隠禅師のようでもあり、またイエス様のようでもあった。その覚者は私の心を読み取って答えた、「分別智を捨てよ」と。そうだ、イエスさんと白隠禅師は実は同一人物の別の相だったのだ。

この事実気付いた時に私は此岸に戻っていた。「死」よりも強力な「無限」をどのように克服したのか、私はいまだに理解していない。ただ此岸に戻って来た時に、私には友人が居た。友人の名は阿修羅と言った。別の名を大天使ガブリエルとも、殉教者アリとも呼ばれていた。私はしばらくこの友と、放浪の旅を続けることとなる。

23、救いと転生

私はふとしたきっかけで、小博多晴子と名乗る女性に相談を受けた。どうやら私が天上界とのルートを持っていると言うことを、私の代理人を通じて聞いたらしい。その代理人も、事件の解決ならゴルゴ13にでも話を入れれば良いものを、私の方が断然に格安なのが魅力だったらしい。

私は都内のとある場所で晴子さんと会った。私はゴルゴと違って、握手もすれば、後ろに回られても蹴り倒さない。晴子さんの悩みとは、彼女が最近偉大な発見をしたものの、周りに因縁をつけられて陥れられそうになっているので助けて欲しいと言うものだった。

ちなみに私は単なる「中取り持ち」であって特殊な才能は無いので、彼女を天上界に連れていくことにした。天上界へのルートを今回は友人の阿修羅が用意してくれた。阿修羅は天上界に顔パスで入れるらしい。

天上界で先ずイエスさんと対面させた。彼女は「刺激だけで万能細胞を作る方法を発見した」と自己紹介した。彼女の場合、刺激とは匂いであると言う。そしてその細胞は「JIR細胞」と命名されたが、JIRとは「JIRO Inspired Ramen」の略だと言うことだ。

晴子さんの悩みは、その作成方法について学会発表したところ世界的な評価を受けたが、彼女の成功をねたむ人々に陥れられて「嘘つき」呼ばわりされ、世間の評価も1週間で手のひらを返したかのようになってしまったとのことだった。

イエスは晴子さんを、「私も同じことを経験しました」と慰めた。「2千年前のことですが、私がエルサレムに入るときは王様扱いで歓迎されたのに、そのわずか1週間後には十字架に付けられて人々の罵声を浴びました」。晴子さんはイエスにその先を尋ねた。自分の参考にしたかったのだ。「はい、十字架上で無残に死に、3日後に蘇りました」。「やっぱり一度死んじゃうのですね。私は死にたくありません」、晴子さんは慰められていないようだった。

仕方ないので今度はヨガマスターの所に連れて行った。マスターは、「人生の現実と夢は裏表だ」と諭した。「今あなたが被っていることは、実ははかない夢かもしれない」「人は誰でも神の化身だ。あなたもおそらくシバ神の化身であろう。シバ神は破壊を司る。今こそ創造神であるブラフマンと一体化しなさい」とも教えた。「どうしたら一体化できるのですか」、そう尋ねると、「苦行して輪廻して、次の生で一体化し、その生に於いて名誉を回復できる」と教えた。「次の生ですか・・・」、晴子さんは待てないようだった。

最後に釈迦の所に連れて行った。釈迦は事情を聞くと先ず、「執着を捨てよ」と諭した。「匂いも刺激も皆うつろで実態の無いものだ。実態のない刺激に拘るから苦しみが生まれる」とも教えた。「六正道と四諦の教えを学び実行しなさい。ひたすら参禅して悟りを得なさい。ジョブスも放浪の末に禅を体験してマックを世に出したのだ。朝の来ない夜は無い。喝」とも導いた。晴子さんは騙されたと思って座禅を試してみた。するとしばらくして雷神が顕現した。

「分かりました。JIR細胞は物理的的刺激や酸アルカリによる刺激よりも電磁的的刺激による方が、再現性があるということですね。確かに宇宙に生命が出来たきっかけも、雷に依るものでした」、悟りを得た晴子さんの顔は輝いていた。釈迦の脇に居た文殊菩薩が、「あなたの今回の成果は、勘やコツが必要な蓋然的世界にありました。エジソンは電球を作るのに100回失敗しましたが、あなたは若いのに数回目に出来てしまった。好事魔多しです。」と続けた。

気が付くと皆は天上界から此岸に戻っていた。「蓋然的世界も悪くないようね。勘やコツって実は素晴らしいものではないかしら。私は確定論的な科学的社会に拘っていました」、晴子さんは悟りを得て楽になったようだった。これでもう彼女にPTSDとか自殺の心配はないであろう。今回の私のミッションはこれで終わった。

24、タモリさんと小保方さん

TVの長寿番組だったタモリさんの「いいとも！」が終わった。好評なうちの終了で、視聴率も高く、安倍首相まで登場したりした。その高視聴率と長寿の要因は、何と言っても天才タモリさんの「脱力系」とも言うべき運営態度であっただろう。昼休みのひと時、彼の力まず無為自然な進行に心の安らぎと気分転換を感じた人も多いのではないかな。

瞑想録（その1）

タモリさんの人生訓は「やる気のある者は去れ！」だそうだが、それをそのまま実行してきたこの30年であった。早稲田中退と言う「勲章」に負けずに、その「実は頭が切れる」ところを、一見能力の無駄使いにも見えるお笑いと言う分野に注入した、ある意味パイオニアと言ってよい。若いころはむちゃくちゃ加減が半端でなかったために赤塚不二夫さん達に見出されたのだが、このころのエピソード・武勇伝は山とある。そして番組が終わった今、タモリさんは心おきなく念願の昼酒にいそしんでいると言う。

ところでその同じ早稲田大学にAO入試と言うやはりゆるい入り方をして、そのあとトントン拍子に博士号まで取り、寝食も忘れて大好きな研究に励み世界的な発見まで「した」のに、今非難轟々な若い女性が居る。小保方晴子さんである。大発見をした当時は英雄扱いだったものを、その発見にあちこちからケチがついてからは、呼び捨て扱いで佐村河内氏と並び称されるほどだ。

これを一体どう考えたら良いのだろうか。頑張った小保方さんがぼろくそに言われて入院するほどで、他方テキトーにやったタモリさんが高評価されている。どちらも同じく自分が好んで入った世界なのに。世の中に公平とか努力評価とか、神とかは居ないのであろうか。

第1に言えることは入った世界の違いである。タモリさんの方は「面白ければ嘘でも良い」と言う世界、他方小保方さんは「嘘も間違いも非厳密も全部曝し首」と言う容赦のない世界だと言うことだ。小保方さんは昨日の会見で自分の研究者としての幼さを謝罪したが、彼女が最も悔いるべきは世の中の仕組みに対する幼稚さである。彼女は純粋に実験が好きでその世界に入ったのだろうが、その世界は実は欲と名誉にドロドロにまみれた、生き馬の目を抜く容赦のない世界で、彼女は言わば「赤子がいきなり賭場に入ったようなもの」だったのだ。これは彼女の不幸である。

もう一つはタモリさんに見られる「脱力系」が、お笑いに限らず何事においても長続きのこつだと言う、言わば「逆説が実相である」現実があると言う点だ。「人間は努力と辛抱だ」と言った、あたかも義務教育で教わる偽善の大ウソを、小保方さんが見抜けなかったことである。教育の間違い、これは彼女の属した研究分野の常識にもある。「大きい手柄のためなら細かいことは気にせず早く手を上げる」と言う常識が漂っていたことだろう。この点でも彼女は犠牲者なのだが、教育や組織と言うのは巧妙で、教授側や上司側は「手柄を出せば俺の物、失敗すればお前のせい」と言う構造で出来ていて、だれも責任はとらない。

小保方さんに似た人が過去に少なくとも2人いた。1人目はイエスさん、2人目はジャンヌ・ダルクである。ジャンヌも手柄を横取りされた揚句、スケープゴートにされて死刑にされた。彼女はこうした歴史の初歩も見落とすほどに、若いうちに調子良く行きすぎたのである。私は彼女がペテン師だとは思っていない。せいぜい虚言癖くらいで悪意はないだろう。でもこうなってしまうともう元には戻れそうもない。才能は多少惜しいが、別の人生を歩むしか道はないだろう。もしかしたらずっと後になって彼女の名誉が回復されるかもしれないが。

さて終わった2つのショー、タモリさんと小保方さんのどっちが面白かったかは個人の主観に依るだろうが、私的にはタモリさんの「反省しない」をモットーにした脱力系の方が、頭を使わずに笑えて気楽で好きだった。彼の切り返しと切り替えは絶妙である。実際、安倍首相にインタビューした同じ日の直後の企画は、「皆で猿になりきってバナナを奪い合う」と言うナンセンス極まりないゲームで、そこでもタモリさんは数分前の別人のように大活躍していた。小保方さんもそれなりに優秀なのだろうが、タモリさんの天才性と心の余裕には及ばないようである。

私はタモリさんを念頭に、「これからは優秀な人はお笑い芸人になりなさい」と勧めている。まじめな勧奨だ。

25、面白そうな仕事

私は若いころ、理数系がちょっと得意だったばかりに、技術職・研究職を選んで、結局面白くも何ともなかったが、もし今までの経験をもとに、今が職を選ぶ若い時だとしたら、どんな職を選ぶのかシミュレーションしてみた。

1、小原庄助さん

怠け者ではないが下らないことはやりたくない私は、いまだに「これならぜひやりたい」という職業は見当たらない。だからもう一度人生をやり直せるとしても、理想は朝寝・朝酒・朝湯の小原庄助さんだ。彼にとって唯一残念なことは、身上が尽きる前に寿命が尽きなかったこと。私は60歳くらいで、ピンピンコロリで逝きたい。

2、塾講師

結構最近まで塾講師は「大学に残れなかったツキのないインテリ的なれの果て」と言う感じで、能力の割に世間の評価は低かった。だが評価が低いと言うことは入りやすいということだ。それに正の教師と違ってPTAも生徒指導も転勤もない。だから花さえ

瞑想録（その1）

捨てれば結構悪くない。やりたいことが別途あれば別だが、ないならこの辺がちょうど良いお茶濁しだ。

3、トラック運転手

トラック運転手も、大型免許さえ取ってしまえば、あとは荷物を運ぶだけ。起点と終点と着時刻だけ指定されてあとは自由、大型トラックで天下御免なんて言うのもなかなか乙なものだ。途中でB級グルメを食べ、助手席に彼女を乗せてなんて、結構やりたい放題、仕事とは思えないほど自由だ。

4、占い師

占いは面白いよ。全ての占いが真実だとは思っていないが、私が好きなのは手相、人相、それに易だ。占いは科学のように根拠もデータも要らないし、キリスト教や科学のように狭量な異端審問もない。精神的にかなり楽だね。しかも顔や手の形状の形象的思弁的特徴抽出と言う、科学ではご法度になっている、人本来の知恵が使える。主観的なヒラメキの勝負と言うところが気持ちの良い頭の体操になっていて、清々しい。

5、旅行代理店の店員

会社勤めならこれかな。営業のような濃密な人間関係や過酷なノルマもなさそうだし、一期一会で旅行商品を買ったりオーダーメイドの旅行を作ってあげたりする。「ほう、札幌の次の客は指宿に行きたいおばあさんで、その次はサンフランシスコヒッチハイクの学生かよ」なんて、結構入れ替り立ち替わりで、変遷が何気に楽しいね。それにクレームも少なそうだし。

6、芸術家

これも「受けさえ良ければ嘘でも良い」と、堅苦しくない所が良い。芸術と言っても色々あるけど、絵画とか音楽とか小説とかもう出来上がった分野は競争が厳しそうだから、もっとマイペースでやれるニッチで無名な分野が良いね。この前TVで見たけど、高齢で整理解雇されたおじさんが木工の根付けを趣味で始めたら結構売れたと言うのがあった。こう言うのは良いね。ただ残念なことに、私にはこちら方面の才能がまるでないのだ。

7、思弁家

思弁とは実験を伴わずに頭だけで物を考えること。身近なところでは哲学とか数学とか宗教とかがその一例で、実の所何でも作れちゃう。ただこれらの分野も、既成の型にはまってやろうとすると、従来の先人の成果をまず学習しないとイケないから疲れ

てしまう。私はもっと広く、また自由に、論理ではなく情理で思弁したい。また宗教は人が関わってくるから遠慮したい。と言うことで、私は人に認められなくても良いから、素朴な疑問に自分なりの解答を与えることを、マイペースでやってみたい気がする。まあ食えないけどね。

26、なぜユダヤ人は神を捨てなかったのか

以前、あるブログ友達とやりとりしていて、「あの現金なユダヤ人たちが、バビロン捕囚の際に、どうしてそんな役に立たない神など、捨てちまわなかったのか」と問題提起されたことがあった。確かに指摘ごもっともであり、普通は捨てるだろうと思えるが、実際に起こった現象は、その悲惨な境遇に更に塩を塗り込むような、ユダヤ人の原罪を声高に指摘する、預言者たちの出現であった。

私もこの答えがすぐには浮かばなかった。七不思議のひとつと言って良いほどだった。最初に思いついたのは、「この預言者たちが、実は支配民族のバビロニアから送り込まれた宣撫の手先ではなかったか」と言う「スパイ説」だが、ちょっとSFがかり過ぎている。そこでウィキペディア等を参考に自分なりに調べた結果、どうも現実には「捕囚などすぐに終わる」と気楽に考えていたユダヤ人の方が圧倒的に多く、原罪を説いた預言者たちは実は小数派だったと言うことだ。

ところが捕囚はすぐに終わるどころか、エルサレムの神殿まで破壊されてしまう。つまり歴史の皮肉で、少数派の言い分が現実になってしまったのだ。そしてこの少数派の見解のみが書き残されて聖書として固定化された結果、今ではあたかも彼らが正義の多数派であったかの錯覚を起こすほどになってしまっていると言うことだ。ただ幸いなことに、イエスさんの知恵でも分かるように、ユダヤ人の現金さは、これら預言者にもかかわらず、健在で続いた。

ここで話が終われば、上記した一連の話はあくまでもユダヤ人内部の局所的な問題であり、単に頭の体操に終わったのだが、どうもそうではないように思える。この「原罪説」を単なるレトリックでないとばかりに大真面目に取った、石部堅吉みたいなあるいはピエロみたいな輩が、後になって出現する。即ち使徒パウロである。

パウロはユダヤ人の知恵者イエスの言動のうち、知恵の部分はどうも理解できなかったようで、その怪我の功名で「イエスの死は人々の原罪の贖いである」と解釈した。そう言う解釈をするならご本尊様はイエスさんよりも大悪党のバラバだった方が、よっぽど「回心」を強調出来て都合が良かったのだろうが、まあとりあえず、イエスさんをそう

瞑想録（その1）

すり替えて、中身はまるっきり「パウロ教」なのだが、それでは看板に迫力が出ないので、「イエス教でござい」として世界に売り出した。

そして今このパウロ教は世界の3分の1を占めるに至っている。兄弟筋に当たるイスラム教と共産主義を加えると、世界の半分以上がパウロの思いつきに毒されてしまっているのだ。つまりバビロン捕囚のあだ花である原罪思想は、今や世界規模の伝染病と言う癌に全身転移してしまっている。ちょっとした気まぐれが地球の運命まで左右しているのだ。

実はこの大ウソを除去するチャンスは歴史上あった。マニ教である。マニ教はゾロアスター教を母体に東方西方のあらゆる宗教を取り入れた混合宗教で、3世紀ごろにはローマ帝国でキリスト教を凌駕するほどの勢力を誇っていた。聖アウグスティヌスが若い頃はまっていたのもこのマニ教である。ここで「キリスト教 vs. マニ教」と言っても、どちらも宗教なのだから思弁の所産であり、どちらがより正しいと言うことはなく、単に個々人がどれを選ぶかの選択の問題なのだが、アウグスティヌスはキリスト教の方を選んだ。

そのアウグスティヌスが、かつての同僚のマニ教をあそこまで恐れたのは、マニ教が彼に反駁するのに、マニの書ではなくキリスト教の聖書を用いたことだった。マニ教に於いてもイエスさんは大聖人であり、しかも彼の知恵を遥かに良く理解していた。つまり、パウロ教よりもマニ教の方がよりイエスさんの正統後継者であると言うことを、アウグスティヌスも認めざるを得なくて、だからこそ余計向きになって反駁したのである。

だが、本来なら現在世界宗教の一角をなしているはずのマニ教は、パウロ教の裏工作に負けて、この世から姿を消してしまう。ローマ皇帝に讒言して「マニ教禁止令」を出させたのだ。こうして、あたかも指名最下位だったスターリンが独裁者に成り上がるがごとく、逆転勝利したパウロ教が現在まで生き残り、世界の3分の1がありがたがって礼拝する構図となっている。

パウロ教が勝てたもう一つの理由は、マルクスの共産主義革命と同じ原理なのだが、難しいことを言わない分だけ、数では圧倒的な普通の市民（労働者）を動員できたことにある。マニ教はグノーシス的、つまり密教的神智主義的傾向があってインテリに好かれたのだが、インテリは数では労働者におよそ勝てない。つまりパウロ教と言い共産主義と言い、愚かが世界を固定する構図になっているのだ。これが世界の不幸でなくて何であろうか。

マニ教はその後急速に勢いを失い、その関連文書のほとんどは「異端の書」として廃棄されてしまった。私はマニ教のことさらの信奉者ではないが、思想の選択の種類は出来る限り多種多様であることを望むものである。その意味でマニ教のみならず、ゾロアスター教、ミトラ教、ネストリウス派等、失われた雄大な思弁の出来る限りの復活を希求している。たとえ自分と違っていても、廃棄は蛮行である。

27、科学技術の価値

現代は科学技術全盛の時代である。先ず初等教育、昔なら藩校や寺子屋で読み書きそろばんとか論語とかを習ったのだが、現代は主要五教科、中でも理数教育だ。地理や歴史も教育勅語や古事記の朗読ではなく、ひたすら事実の詰め込みだ。その割に、「勤を養う」とか「人の道を考える」と言うような授業は皆無である。

高等教育に至っても基本は科学だ。医学、工学、薬学、看護学など、ほとんどの人には習ってもつまらないが手に職が付くから習うような学問も、文学や理学のように直接役に立たないけど教養として学ぶ学問も、いずれも学ぶ対象は何らかの科学技術である。

現代教育が科学一辺倒である理由として良く語られるのが、「科学は客観的でありかつ事実であるところ、客観精神を身につけるところは人として最大の重要性を持つから」と言う理由である。客観的批判精神の重要性については、異議をはさむ気はない。例えば邪推とか迷信と言った愚かなことを避けられるし、個人の自由の尊厳も、警察の取り調べや裁判所の判決も、事実や客観性を無視されると恐怖政治になってしまう。

だが、次の話はどうか。ある科学者の父親の目の前で、息子が飴玉を誤飲して苦しんでいる。常識があればあわてて息子を助けるだろう。ところがこの父親は「実験観察」と称してただ眺めていた。息子がやっとなんか飴玉を吐き出すと、その父親は「吐瀉で実験終了」とつぶやいただけだった。これは実話である。科学偏重教育は、マッドサイエンティストのみならず、ここまで無感動で人間力のない人間をも作り出すのである。

さて、その科学だが、以前このブログでも論じたように、科学技術が偏重される本当の理由はその客観性にあるのではない。そうではなくてその付加価値の高さにある。経済至上主義がグローバルスタンダードになっている近現代に於いて、科学技術の高さは戦前までは国力・戦闘力に直結しており、戦後は付加価値に依る経済大国・国

力の源であるために、功利主義的に科学技術が偏重されているのである。「理系を増やせ」という国策も、根っこはここにある。

ところが他方で科学技術は当たり前でもある。思弁系の科学、例えば数学や哲学ではどんな思弁も可能だから、「田中角栄は無罪だ」と言うような頓珍漢な結論が導引されることもあるが、ほとんどの科学は実験やデータを根拠としているので、実際に起こること、つまり当たり前のことしか出てこない。STAP のように「意外なこと」も時には起こるが、起こってしまえば当たり前なのである。理系の学生で「科学は面白い」と言う人も居るが、実は当たり前のことを面白がっているだけなのだ。数式の変形が典型である。

ところで、以上の議論を総合すると、「当たり前のことに付加価値がある」という結論が導かれることになる。この結論は素朴にどこかおかしいと思わないか。当たり前とは例えば、「砂糖は甘い」とか「指を切ると痛い」とか「階段を踏み外すと転げ落ちる」とかそう言った諸々である。こんなことがなぜ付加価値を生むのか。でも現に付加価値を生んでいるのだ。「鉄鉱石を燃やすと鉄が出る」、「稲の種をまくと稲が生える」、こう言った例を引いてみると、たしかに当たり前から付加価値が出てきそうな気がする。

さらに「鉄を作る際に適度の酸素を吹き込むと良い鉄の塊ができる」、「別の稲をかけ合わせてみたらより実る稲が出来た」、この辺になってくるとかなり科学技術に近づいてくる。よりさらに「鉄を伸ばして曲げたら船になった」、「稲作を系統的行ったら食料が安定化した」、ここまで行くともう立派な科学技術で、具体的な再現条件を数値化すれば良いだけだ。現に船が出来たり食糧問題が解決したりと言ったご利益、即ち付加価値も大きい。

こういう「付加価値サイクル」の創成は、科学史の始めのうちは偶然や興味本位だったかもしれないが、やがて意図的になっていった。系統のかつ効率的に行いその成果を極限にまで高めることを制度的に行っているのが現代の科学技術政策で、教育システムもその一翼を担っている。だから付加価値を生まない論語なんか習わないし、教育に人としての成長や人間力の涵養などは期待していない。ただロボットのように従順な「高級技術奴隷」が山ほどできれば良いのだ。

さて、こうして「高度化」した科学技術なのだが、実は依然として「当たり前」なのである。だいたい物理的・化学的に当たり前でない物が実現するわけがないだろう。実現できたと言うことはその過程でどんな気付きが介在したとしても、それは当たり前なのであ

る。発見前からその成功が約束されていたから発見できたのだ。科学技術は手品でも何でもないし、驚くに値することなど実は何もない。ただ人はどこに当たり前があるかを知らないから、色々苦労するし発見すれば名誉にもなると言う仕組みになっているだけだ。

ではなぜ人は、当たりの事前に約束されたことを「発見」するために、このような壮大な仕組みを組まなければならなかったのか。それを知るには人にもっとも近いチンパンジーを見てみると良い。たまに自力でカギを開けられるチンパーや、棒で物を取るチンパーが居るが、これらの技はどのチンパーでも出来るわけではない。地アタマの良いチンパーにしかできないのだが、でも我々人類から見ればこれらは「幼い気付き」に過ぎない。どんなに頭の良いチンパーでも三平方の定理は発見できないだろう。

人も結局同じことなのだ。今の人類もまだ進化の途上にあるので、当たりのことを直感で見抜くのに限度があって、そこで試行錯誤を繰り返した揚句当たり前を発見しては感動しているのである。今の人よりはるかに利口な宇宙人が居るとしたら、彼らには今の我々人類の営みが、さもチンパーのように愚かに見えていることであろう。そして笑うであろう、「こいつらまた当たり前のことに気付いて感動しているぜ」と。

私はせめて人類がもう少しで良いから進化して、せっかくもらった頭脳を生かして、「当たり前でないこと」「真に意外なこと」「真に面白いこと」に積極的価値を、経済的価値を越えた深い意義を、言わば多元的に見出して、魂の真の飛翔を行って欲しいと望むのだ。もういい加減地を這わなくても良いだろう。

28、数の成り立ち

物事の基本は「ある・なし」である。あるときはあり、ない時はない。この「ない」が0であり「ある」が1である。すると自然に「いくつあるか」と言う問いになり、1, 2, 3...と加法及び整数が生成される。すると続いて尺取りで、「まとめていくつあるか」と言う問いになり、乗法が生成される。

これらから自然に逆演算としての減法、除法が生起される。これらからまた自然に負数、分数、小数、無理数、そして虚数が生成される。無理数まで拡張されるとこれは数直線になり、これを複数组み合わせることで、座標、ベクトル、そして多次元空間が認識される。

瞑想録（その1）

数は一般化されて変数となり、変数は関数関係を作り、多次元空間上の関数は描けて、その接線とか、囲われた面積とかを自然に知りたくなり、ここに無限大及び無限小を媒介として微分・積分の発想が招来される。

以上見てきたように、近代解析学の大元はただ一重に「ある・ない」の二律背反であり、これさえあれば残りは自然に、ほぼ自動的に導出される。そして現代科学は、この導出された道具を使って記述される。ここで「ある・ない」、これは典型的に顕教であるから、現代科学は実に顕教の焼き直しと言っても良い。直接的にはキリスト教の聖書信仰の焼き直しである。

ならば「密教の数字はないのか」と問うのは自然である。もしあれば、おそらくこれは、顕教数字と相対を成すであろう。その1つの可能性が、「全ての数字は、0からの積み上げでなく ∞ からの落ちこぼれ、展開によって生成される」と言う考え方である。「 ∞ ＝神」と思えば、これは一神教の描像そのものである。この世界では、「いくら除いても減らない」とか「部分は全体を含む」と言うことがありえるだろう。

別の見方もある。密教の基本は、「悟り」にも典型的に見えるように、「ある」とも「ない」とも断言しないこと、あるいは「あると言うほどにはなく、ないと言うほどにはある」と言った「ふんわり」した心境である。アニミズムの「万物に生かされている」感覚もこれに近い。

「ある or ない」を点とするならば、この「ふんわり」は点に凝縮されずに「広がり」を持ったような、かつ境界があいまいなようなものになろう。即ち「連続体」である。この連続体について「それはいくつありますか」と聞いても意味がない。いくつにでも分けられるがその数は本質的でないからだ。

例えば日本列島、これを観ずるとき、まとめて1つとも、本州等4つとも、都道府県等約50個とも分けることができる。分け方に依って見え方や強調点は多少異なってくるものの、日本列島の本質が変わってくるわけではない。つまり数は、仮にあっても重要でない。

あるいは相撲の決まり手、48手とも82手とも言われるが、技と技の間の切れの良さと認識力によって数は多くも少なくも出来るが、現行この辺で落ち着いていると言うことだ。なお、人の手足の長さや本数が違っていたら、技の構成もまるで変わるであろう。

瞑想録（その1）

例えば「寄り切り」を見よう。この一言には実は無限のバリエーションが含まれている。つまり点でなく連続体である。そしてその中には、「寄り倒し」に近い寄り切りもあれば、「押し出し」に近い寄り切りもある。この意味で境界はあいまいであるが、でもだからと言って「寄り切り」自体が無くなるわけではない。そして「突っ張り」とは境界を共有しないであろう。つまり「遠い・近い」がある。そして全体として形成しているのは多面的ではあるものの決して多次元空間ではない。

密教数字とは、このような連続体の集まりとその相互関係を「記述」するものであるが、残念なことに密教の本質は不立文字であるために、顕教数字のような「多様な」展開はどうもありそうにない。少なくともまだ見つけられていない。ただこのような観じ方は、形式的論理的でなく感覚的、つまり勘やコツや知恵と言ったものが介在する全ての行為のあらゆる基礎になっている。

例えば主婦がスーパーでキャベツを買うとき、並んだキャベツの色や大きさや締め方方や値段を総合的に勘案してどれか1つを選択するが、この時の総合選択行為の基本は、顕教的数値化ではなくて連続体的な勘に依る総合的な選好である。もちろん連続体には広がりがありかつ多面的であるから、どの要因に重きを置くかで選好結果が変わる。つまり主観が入るので再現性はなく、この意味で科学ではなく、かつ常に最良を保証するものではない。一言で言えば、密教の連続体の世界はあくまでも蓋然的である。

例えば「ユダヤ人は鉤鼻だ」、これは学問的には否定されている。確かに全く鉤鼻でないユダヤ人の方が多いほどだ。だがユダヤ人にある一団があって、その一団はどう見ても鉤鼻なのだ。学問ではない蓋然的なところで人は特徴を見抜くのであり、これは占いや預言の勘や眼力にも通じるところである。学問や科学をやっているうちは、眼力は要らない。数字さえあれば良い。だが人のもっともすぐれた所は、凡人の見えない所を見抜く知恵者の眼力であると思う。

密教数字や連続体にももっと何らかの法則が見出されて今以上に市民権を得ることが、人類の発達のための段階だと私は思い、これを願っているものである。

29、オスマン帝国の進撃

映画「神聖ローマ運命の日—オスマン帝国の進撃—」を見ました。私としてはシネマ歌舞伎の「ヤマトタケル」以来半年ぶりの映画です。今回の映画は1683年の第2次

瞑想録（その1）

ウィーン包囲をテーマにしています。なお、この映画は日本中で8映画館でしか上映されない、言わばマニアック物です。

歴史上この映画の時点でキリスト教側は、コンスタンチノーブルを既にオスマントルコに取られており、もしウィーンを取られればバチカン・ローマが裸になると言う瀬戸際でした。しかもイスラム側の最終目標は、ローマのサンピエトロ寺院をモスクに変えることでした。

こう見ていくと、今は世界中に癌のように転移跋扈しているキリスト教ですが、歴史的にはモンゴル来襲、チムールの遠征、東ローマ帝国陥落、そして2度にわたるウィーン包囲と、結構存続にかかわる危機があったことが分かります。

今回の映画の主人公は、現存した人物で奇跡をも起こす修道僧として当時著名であった、マルコ・ダビアーニです。彼が呼びかけたキリスト教同盟により、ウィーンはかろうじて保たれることになります。この映画のテーマは、「キリスト教対イスラム教」と言う一神教同士の近親憎悪、互いの潰し合いとも見ることもできます。

映画は歴史の教科書ではないので、史実通りではありません。マルコが子供のころに、オスマンの宰相で今回の戦いの司令官であるカラ・ムスタファと偶然出会っていたと言う設定になっています。そして双方それぞれに、「なぜ全能の神はこの異教徒をわざわざ今まで生かしておいたのか」を考えていたことになっています。これは一神教ならではのテーマでしょう。

カラ・ムスタファは圧倒的大軍を率いて進軍の上ウィーンの城壁を包囲します。そして映画では、マルコとカラは開戦の前夜に密会して互いに問い、そして答えることになります。カラの答えは「アラーが今までお前を生かしたのは、明日殺すためだ」と言い放つのに対し、マルコは「神がお前を今まで生かしたのは、今日お前が悔い改めるためだ」と返します。

このやりとりは当然ながら、物別れに終わります。そして別れる時カラが「インシャー・アッラー」（アラーの御心のままに）と別れのあいさつをすると、マルコも「インシャー・アッラー」と返します。マルコの返事は厳密には異端なのでしょうが、私には「これが、マルコが戦いに勝った瞬間なのだ」と思えました。

次の日に戦いが始まります。戦いはキリスト教側の圧倒的不利で始まりましたが、マルコは軍事顧問としてキリスト教同盟を呼び掛け、これに答えたポーランド国王ヤン3

瞑想録（その1）

世の駆けつけと戦略により戦況は逆転して、最終的にキリスト教同盟側の勝利に終わります。史実上は、ポーランドが呼応したのはポーランドも別の土地でオスマンと争っていたため、これにけん制すると言う側面が強かったのですが。

映画でもう一つ興味深かったのは、一神教で典型的な経典宗教であるキリスト教側にもイスラム教側にも、星や夢を読む超能力的預言者が存在して、重要な役割を演じているところです。マルコは自身ですい星を読み解き、カラはお抱えの予言者に読み解かせます。ちなみに両者の読み解きは一致しており、かつ当たることになりません。

もう一つ興味を持ったのは修道士マルコが、「私ではなく天の神に祈れ」とは何度も言っていたものの、「イエスのみ名によって」とは一度も言っていないことです。やはり奇跡を起こせるほどになると神と直接交信できて、キリストやムハンマドの仲介は不要になるのでしょうか。これも現代的には異端すれすれだったように思います。と言うか、異端とはこの程度のものです。

最後に私は、次には十字軍を破った英雄サラディンをイスラムの側から描いた映画を見たいものだとの感想を持ちました。

30、働かない者は食ってはならないか

「働かない者は食ってはならない」、と言うことわざがある。これを聞き付けた米国人が憤慨して、「日本は何と言う野蛮な国なのだ、基本的人権も知らないのか」と怒りまくったと言う。確かに日本にこう言うことわざはある。しかし、互いに生かされ、人や自然との共助を国民性とした日本人に、このことわざは如何にもそぐわなく見える。

そこで調べてみたところ、このことわざの起源はやはり、ほかならぬ米国人が心のよりどころにしている、新約聖書の使徒パウロの言葉であることが分かった（テサロニケ第2の手紙）。成果主義・効率至上主義の欧米キリスト教なら、これは当然にあるだろう。さらに、マルクスの共産党宣言でも強調されていた。「必要に応じて与えられる」が建前のマルクス教であるが、これもいかにもありそうだ。

ただ日本でも昔から「穀つぶし」と言う言葉があったし、父親が二ートの息子に向かって「働かないで食う飯はうまいか？」と聞くことも良くある。彼らには「製糞器」と言う蔑称もある。だから日本でも全く当てはまらないことではないようだ。もっとも穀つぶしの代表の小原庄助さんも、笑い話の対象ではあるが決して反面教師ではない。

瞑想録（その1）

短編小説家の森博嗣さんはこのことわざを、「日本最低のことわざ」と評している。確かに「働かない＝（自動的に）食えない」では、高利貸しほどに情けも容赦もない。日本の広い心である、「草木国土悉皆成仏」とはかけ離れている。たとえ1分たりとも休めないルームランナー上で、昼夜の中断なく走り続けないとリングサイドに落ちる人であるかのようだ。

私はこのことわざを、「働かないと、たとえ日本でもいずれ食べられないことになりますよ」という意味に取っている。この解釈だと、金持ちの息子が親の遺産や年金で分相応にしかし働かずに暮らすのは、直ちに悪いことではない。ただ、「資金が切れた時には相応に働くなり別途手当を考えなさい」と言うことだ。

私の場合残念なことに、そう言う親も金の当てもなかったもので、仕方なく今まで働いて、糊口を塗ってきた。本来ならその拘束時間にやりたかった文化活動も山ほどあったのだが、一番脂が乗った時にもそのほとんどをあきらめてきた。ただ私には「働かずに食う飯は…」と尋ねられて、悪びれずに「最高にうまいね」と答える自信はある。いずれ何か新しい文化に寄与する予感があるからだ。直木賞作家のねじめ正一さんだって、売れるまでは多分に穀つぶしだった。日本にはそれを許す民度の高さ、裕度があるのだ。

日本人は古来より、勤勉な民族として知られていた。今アゼルバイジャンが親日国なのも、戦後の抑留者たちがロシア兵の監視もないのに当地で良い仕事をしたからだ。日本人の勤勉さはそもそも恵まれた自然環境等に依るもの、言わば余裕の産物であって、「明日食えなくなるから」と言った卑しいものではない。むしろ武士道にも連なる高貴なものだ。クールジャパンの対象となっているアニメやゲームも、商業主義のために経営者に依って強制的に作られたものであろうか。

人は多かれ少なかれ生まれつき、実は勤勉で努力家で智恵好きなのだ。今の学生の多くが勉強嫌いで会社員のほとんどが社畜なのは、人としての自然以上に強制されていて、不当に競争を煽られているからだ。現に成績の悪い子でも、スポーツには熱心だったり冗談がことさらに笑えたりする。会社では「仕事せず」でも、見知らぬ困窮者を見ると自ら進んで助けに入るし、こと趣味となると玄人はだした。

映画の「テルマエ・ロマエ」でも主人公のルシウス技師が「この民族は自分の名誉のためでないのに働くのか！」と驚いている。ほとんど義務のなかったローマ市民にとってさえも驚きなのである。だからことさらに「働かざる者は食ってはならない」などと言

われなくても、ほとんどの日本人は働くのだ。そしてその結果食えているが、それを自分の手柄でなく多分に「お天道様の恵み」と理解している。

もちろん日本にもニートとか落ちこぼれは居るが、そのほとんどが輸入された競争社会になじめないことの結果ではないか。だから森さんの言うように、日本ほど「働かざる者・・・」が不要な言い回しである民族はないのだと思う。この言葉は日本では死語で良い。

31、していました「しない生活」

若手で、「頭が良すぎる坊さん」として有名な小池龍之介さんが、新刊の「しない生活」を出したので、見てみました。と言っても私は自他ともに認めるプア充ですから、わずか1000円足らずの本ですが、購入したのではなく新聞の宣伝で見ただけです。内容は、お釈迦様の知恵を現代生活に合わせて、「108つの『しないお稽古』」にまとめたものです。

この108カ条をつらつら読むに、私としては「意外な教えに驚いた」と言うよりも、「これだったら以前からやっているよな」的な項目が多いのに、自分で驚いた次第です。以下にその内から10項目を掲げてみます。

・自分の優先順位が低いのに腹を立てるな →私は会社でも家庭でも、「格が上か下か」などは全く気にしたことはありません。会社と言っても所詮は社畜でしょう。「偉い奴隷」に何か意味はありますか？そんな「おだて」には全く踊らされません。おかげで足も引っ張られません。

・悪意のない愚かさに怒るな →これは難しかったですね。頭の悪い高学歴者に限って、一つしかない金槌をぶんぶん振り回して、危なくて近寄れなかったですからね。でもまあ、用もないのに近寄らないのが一番です。

・「いざとなれば今の立場も捨てられる」と思えば頑張れる →これもできます。そもそも今大した立場にないからです。これが中途半端に苦労して得た地位でもあれば別なのかもしれませんが、そんな面倒なものは鼻から欲しくありませんでした。

・信条を貫くか諦めるかのタイミングを見極める →至極ごもつともです。信条がない者に生きる価値はありませんが、と言ってこれに縛られるようでは本末転倒だからで

瞑想録（その1）

す。ただ難しいのは具体的なタイミングの見極め方で、これは学校等では教授してくれません。人生経験を積んで試行錯誤するしかないのです。

・「自分を正しく理解してほしい」という欲望を手放す →これも私は鼻からありませんでした。他人に何も期待していないということです。その代りわたしもあなたを正しく理解しようなどと務めませんので、あなた方も私に何も期待しないでください。

・「人から失望されても構わない」という勇気を持つ →これも私は鼻から構いませんでした。と言うか、変に期待されると面倒なので、自ら率先して「私は期待に足る人物ではありません」ということをことさらに強調してきました。おかげでトラブルに巻き込まれることも少なかったように思います。

・正義感をふりかざしても醜悪な小悪人になるだけ →これも肌で実感しています。私が正義漢ぶるなどと言う面倒なことはおよそあり得ないのですが、「正義のラッパを吹く噴飯な小物」は山ほど見てきました。まあ、見え透いているのでだまされる方もバカですが。最近多いのは「リケジョ」ラッパです。ラッパ吹きの特徴は、決して自分では手を汚さないことです。

・人から良い扱いを受けた時こそ諸行無常を念じておく →およそ赤の他人が、自分の得もないのに親切にするなどと言うことはあり得ません。私は後々の借りになるのが嫌なので、不思議な親切はいつもこちらから断るようにしています。

・無理に周りに合わせるような偽りの優しさは捨てる →そもそも無理に他人に合わせるなどと言う行為が、自殺行為ほど危険な巨大な隙です。絶対に甘く見られて付け入られます。こんなことをしないのは、人生のイロハと言って良いでしょう。こういうことをしなくても時に火の粉が降りかかるほど、この世は面倒なものです。

・物事に集中するには、頑張りすぎずだらけ過ぎず →これも言い得て妙ですね。「頑張り過ぎずだらけ過ぎず」、これこそが長続きのこつです。最も美しい物は、いぶし銀のように渋く目立たないものです。ではどの辺が中庸か、これが体得できたら、あなたの人格はかなりの完成域にあると言って良いでしょう。

全般としてお釈迦様の知恵である「執着を捨てる」「苦行は要らない」という原則を個々の場面に展開した形となっています。悟りの極意である「あると言うほどにはなく、ないと言うほどにはある」状態に近づくための漸近線の集まりになっているとも言えます。執着が無駄なエネルギーの浪費となり、せっかくのエネルギーで自らを潰してい

るのです。お釈迦様は「無常だから何もするな」と言っているのではなく、「スマートにやろうよ」と言っている、私にはそう思えます。

32、智慧はゲリラだ

智慧とかひらめきとか、主観であり、霊長類の長たる人類に最も特権的な能力だ。その大元は生物が普遍に持つ防衛本能だろうが、人類の場合その域を越えて大きく発展していることに特徴がある。道具を使い作ることも、人工的に火を起こすことも、更には犬猫の家畜化、稲作の開始、豆腐ともやしの栽培、山谷に道路を付ける等々、全部人の知恵の発露である。

しかもこれら列挙した知恵は今から優に2000年以上前の、縄文時代以前の人類によって「発見」されている。このころの人類は既に今の人類と同じほどの脳容量を持っていただろうが、それにしても前提となる既存の知見はわずかであり、しかも電磁計測手段はおろか望遠鏡や顕微鏡と言った幾何光学的手段すら持っていなかった彼らが、一重に直観でこれらの偉業を成し遂げたのである。冒頭に列挙したどの発見も、その革新度は山中センセーの IPS 細胞と言ったノーベル賞級の発見をはるかに凌駕している。人のひらめきや直感とはそれほどすごいのだ。

ところがこのひらめきとか発見といった能力、ここまで人類に決定的でありながら、「系統的習得法」と言ったものが存在していない。もし「ひらめき脳」の開発が、あたかも義務教育の算数や漢字習得のように座学でかつ大量生産で系統的にできるならば、人類の発展や幸福の向上は今とは比較にならないほど飛躍的になるだろう。ところが残念なことに、このような方法や法則は、少なくともまだ発見されていない。だから人類の進歩は、多分に気まぐれなのだ。本質的に関係する個人の地アタマの良さと言う僥倖に全面的に依存している。

智慧やひらめきの系統的習得には、これら智慧やひらめきの構造や体系に関する系統的理解が前提となるが、この前提もまた理解されていないのだ。あたかも「ひらめきの統一理論」と言うべきものは、まだ見つかっていない。現にひらめいた人のその瞬間を訪ねても、前提となるヒントや環境はあったとしても、ひらめき自身は「突然ひらめいた」「瞑想したら天から降って来た」等で、今後の分析になるようなヒントはおよそ見られない。

もしひらめきの系統的方法のようなものが見つかれば、これはソクラテスの哲学のような「お遊び」ではなく、付加価値としても膨大であって、「ごつう儲かりますよ」と言う

瞑想録（その1）

種類のものである。新規ビジネスの提案や新しいB級グルメやユルキャラの開発、売れる漫画や小説の創作等、経済レベルのみならず芸術や文学やスポーツに至るまで、その恩恵は計り知れない。師弟関係で盗むように習得するノーハウだって、「マニュアルもどき」で可能になるだろう。

と言う訳で、儲けに興味のないプア充の小生も、自分なりにひらめきの構造について、時あるごとに瞑想している。そして気付いたのだが、知恵とかひらめきとかは統一的どころか、むしろ「反統一的」だということだ。つまり気付きやひらめきは前例がなく初めてだから価値があるのであり、もし他のひらめきや気付きから系統的かつ自動的に導出できるなら、その手の「ひらめき」に価値は殆どないのだ。

例えば水平展開、会社で良くやる奴だが、これは誰にでも思いつくし、やって当たり前でちっともすごいものがないのだ。だから知恵やひらめきは系統化を拒絶する、あるいはこれまでの知恵に垂直と言うか、出来るだけ飛んでかけ離れていることがその命と言える、この意味でひらめきは系統化を拒んでいるのだ。

もっと厳密に言うならば、物事は全て芸事と同じで、「序・破・離」と言う順序を踏む。この内序は先人に倣うところで、ここは新規である必要はないから、あるいは系統的方法があるかもしれない。系統的方法が序の部分だけでも見つければ、先に挙げた例のうち「師から盗む」的なノーハウの獲得は極めてたやすく確実にかつ経済的に可能になる。だが離の部分、再発見でない本当のひらめきは、上述したように悪質なほどに反系統的なのだ。

強いて言えば「地アタマを訓練する」と言う修業は、間接的ではあるがあり得るだろう。義務教育にもそのような要素はあるし、最近は大学でも「地元商店街と組んで活性化の提案をする」と言った提案型の授業が増えているが、これも地アタマの訓練と言って良い。名門ハーバードのMBAコースの授業は基本的にケーススタディだと言う。これは「提案型」が重要であることと、その提案型に「万能法則はない」ことを、同時に物語っている。

つまりひらめきとか知恵とかはゲリラなのだ。神出鬼没である。同じ環境に置かれても、ひらめきのある人は気付くし無い人は気付かない。どんな状況でもひらめきがあるという保証もないし、「ひらめいてみたら再発見だった」と言う場合も多いだろう。つまりひらめきとは、学問とは対極の究極的な主観なのだ。主観だから再現性はないし答えも一つではない。そして多数のひらめきには多分に優劣がある。

だがそれでも私は言いたい、科学技術全盛の時代にあって「主観は捨てるべきだ」あるいは「正解は一つしかない」と言う「常識」が、義務教育から始まってずっと刷り込まれ蔓延しすぎていないか。主観があるから世の中は面白いし、答えが多様だから人一人ひとりの存在に価値があると言うのが本来ではないか。今の科学主義は人の能力と幸福を不当に制限しているように見える。

だから私は、現行の科学主義まん延に依るつまらない世界を少しでも面白くしたいがゆえに、今でも懲りずにしばしば、知恵やひらめきにあるだろう「何らかの構造」、「諸行無常程度のゆるい整合性」あるいは「お笑い等に見える思いつきの面白さ」を、他人のためと言うよりまず自分の解放のために、瞑想し続けているのだ。

ちなみに最近感心したひらめきの例は、漫画「テルマエ・ロマエ」に見るヤマザキマリさんの気付きだ。すなわち古代ローマの温泉技師が現代日本にワープして、日本の温泉に関する諸工夫に大真面目に感動すると言う設定である。イタリアと言うどちらかと言うと変哲のない国を題材にして、ここまで奇天烈なアイデアを思いつく、彼女の脳の構造を見てみたいものだ。

この漫画は2年前に映画化され、最近はその「続編」が上映されている。ところがこの続編になると今先に述べた「知恵の再発見」現象に陥っていて、ひらめきをもはや感じず、私には退屈であった。これは、「芸術や知恵は常に前例の破壊と言う前段階を必要とする」という、ある種の「知恵に関する法則」なのかもしれない。

33、グレーゾーン

「グレーゾーン」と言う和製英語がある。白黒をつけられない宙ぶらりんの状態で、大抵悪い意味で使われる。法律でグレーゾーンと言えば、条文が適応できるか否か悩ましい状態で、人により状況により微妙に解釈が異なるような状態を言う。例えば、裸に近い画像を卑猥と見るのか芸術と見るのか悩ましいような状態である。

さらには、悩ましいことを逆用して我田引水的に自己正当化したり、あるいは悪意の隠れた既成事実を積み重ねることにより風紀をことさらに乱そうとしたりと言った使われ方をするので、グレーゾーンという言葉は悪い意味に捉える場合がほとんどである。

だが果たしてグレーゾーンは本当に悪いことなのだろうか。ここには、グレーゾーンが悪いことだと感じる前提として、「白黒が明確になることこそが正義だ」と言う暗黙の前

瞑想録（その1）

提があることに注意したい。白黒つく、あるいは強引にでも良いから白黒つけることは、本当に良いことだろうか。

たしかに世の中には白黒つけないと事が進まない、あるいは平等にならないで返って情実の温床となってしまうことも多い。例えば何歳から成人か、一票の格差はどこまで許されるか、あるいは血圧の上限値をどこに置くべきか等、はっきりしたしきい値がないものにどうしても白黒をつけざるを得ない場面も多いし、そのために裁判があり科学があるようなものだ。

ところが特に日本人の特徴として、「物事をあいまいにして白黒つけない方が返って美德である」と言った精神構造が、昔からある。これは実は日本に特有の美意識に基づいたものなのだが、外国人、特に欧米キリスト教社会の人々には「不誠実」と映り、さらには「不公平な慣習」と目の敵にされる。最近では日本人ですら「グレイゾーンはけしからん」と考える人が増えているようだ。

ならばここで、日本人特有の「白黒つけない」と言う信条の源を探ってみよう。四季の恵みあふれる自然の美しい国である日本は、昔からその多様性により、「物事はどんなことでも、簡単に白黒が付くような単純なものではない」と感得している。あるいは、「共に生き生かされている」と言うアニミズム的感覚から、「Aは白でBは黒」と言った極端な断定がなじまないような、言わばきらびやかな美意識の世界に我々は身をゆだねている。

これに更に、仏教から来る「善悪一如」と言った一如の発想や、陰陽道から来る「極まるのは良い卦ではない」と言うやはり東洋的な思想の支持があって、東洋をはじめ特に日本では、「中庸こそが最良」と言う高い悟りが庶民に至るまで行き渡っている。仏教の究極である悟りとは、「あるほどにはなく、ないほどにはある状態」とも表現でき、これもやはりグレイゾーンなのだ。

つまりグレイゾーンとは実は中庸であり悟りであり真の魂の安らぎであり、さらに物事すべてに付随する普遍的で除き難い本質であり、つまりむしろ前向きに受け取るべき美しい物、知恵の高い物なのだ。そして我々日本人は、中庸の美德と言う高い概念がない、「薄っぺらな弁論術や非人情の論理優先主義がグローバルスタンダードと化している愚かさ」をこそ指摘すべきなのだ。

もちろん、「中庸がどの辺か」とか「グレイゾーンとはどんな感じか」を知ることは、「白黒とは何か」を知り体感するよりはるかに難しくかつ経験を要することである。かつ人

瞑想録（その1）

によりその中庸の位置が微妙に異なるという意味で再現性の薄い物ではある。だが、だからと言って決して存在しないわけではなく、むしろ厳として存在するのだ。だから、もし我々が浅薄な白黒二値主義が世界にまん延する愚かさを許してしまえば、それはストレートに人類全体への不幸なのだ。

さて、こうして日本人の美意識の高さを、グレーゾーンを通して見てきた上で最後に、なぜこのような高い悟りを持った日本人が、特に庶民レベルに於いてしばしば、横並び主義、あるいは世間体第一主義とでも呼ぶべき、自主性や個の尊重のない上辺のみの低いレベルに陥っているのかを、考えてみたい。

思うにそれは、この「善悪一如」とも言うべき悟りが高すぎるからなのだ。欧米キリスト教徒の、特に聖書信仰のように論理がすべてに優先していれば、形式的だが白黒は付けやすいのだが、そうなった時点で聖書信仰は宗教であることすら放棄して、はるかに低次元の道徳になり下がっている。こう言う世界からは「個の自由」は理解しやすいだろう。もっと高い教えがないからだ。

他方東洋系の複雑を直接に感得する世界に於いては、言わばその悟りが高すぎて庶民レベルの理解することとならず、と言って「個の重要性」の方は高い悟りに隠れて見えない形になっているのだ。言わば、グレーゾーンの高いところが忘れられて形のみ残っている。だから日本人でもグレーゾーンを嫌悪する動きが最近顕著なのだが、今日からはむしろ、グレーゾーンすなわち中庸や悟りの良さを修業により理解する方向に、我々日本人は回帰すべきではないだろうか。

（本論は以上です）